
ハリー・ポッターと邂逅(かいごう)

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリー・ポッターと遡^{かいじう}遊

【Zコード】

Z4945P

【作者名】

クロネコ

【あらすじ】

初めての魔法の世界から戻ってきて数ヶ月 ハリーに 再び 不穏の影が……。

原作と映画を元に ちょっと 自分なりに考えたシナリオを用いた展開になっています。

第一弾の開幕ですッ！

第一章

ある夜 ある家では、1人の男が不適な笑みを浮かべていた。

男の手の中には、古い本が 収まっているようだ。

「これで あの生意気な奴らを……ッ！」男は高らかに笑いながら 叫ぶ。

暗闇の中で光る髪は、不気味なほど輝いている 月のように 見えた。

まるで 何かを予言するかのように 漆黒の闇は、深い。
「これさえあれば あの生意気な小僧も、殺す事が出来る！
あのお方に、出来なかつた 未来を、実現する事が出来るんだ」
まるで 絶対なる力を手に入れた喜びを、面白がつてているようだ。
本も、その事に便乗しているかのように 暗黒を舞きながら 輝いているように見える。

「これで あの方を倒した 魔法使いが死ねば 恐れるものは、どこにもいない。

全ての力は我々に！！

今の時間を大切にしているがいい！

それが、貴様の最期の想い出になるのだからな！！

信頼する者から 死の刃を受け取るが良い！

地獄へ繋がる 光なき 閻の世界へ墮ちるがいいのだッ！」

男は、そう言いながら 笑つていた。

その手にしている 本からは、強い呪が込められているようだ。

これは、誰にも もう 止める事は出来ないのかもしない。

自分の手を汚さずに 相手を確実に死へと導く 恐ろしい 呪だ。

男が崇めていた 魔法使いが、残した闇

ソレを使い

新たな歴史を作り出そうと考えた。

そして 最初に思いついたのが、ある魔法使いを殺す事。

息子から 何かと目障りだと思っていたところなのだ。

それは、自分と同じ道を進む事になるだろう 息子の為であり
自分にとつても 邪魔な枝は、切り落とさなければならぬ とい

う 思いから。

「思ひがけず コレが見つかって 嬉しい事はない！

これで……邪魔な穢れた血の者達も始末する事ができるのだから。

全ては、純潔魔法使いの育成の為に！！

あの方が行つた事を、我らが手にするのだ！

栄光なる 暗黒の時代へと導く為に！」

他の家族は出かけているので この会話を聞いていない。

けれど 扉の向こうから それを聞いている 生き物がいた。

ソレは、大きな目をもつと大きく見開き その様子を伺っているようだ。

どこか 悲しそうな表情を浮かべて 主人が行おうとしている計
画に 耳を立てている。

男は、その様子には気付いた様子がないようで ずっと 擦り寄る
かのように 本を見つめているようだ。

「知らせなければ……！」

生き物は、小さく呟いて 屋敷を飛び出していった。

知らせる為であり 守る為に 魔法使いの元へと急いでいく。

どんなに、恨まれる事があつたとしても 構わない という 想
いを胸に。

「の方は、希望なのだ……。

それを、そもそも簡単に 消させるわけにはいかない

彼が住んでいる 場所へ ソレは、飛んでいった。

闇が、迫ってきて いる事を伝える為に。

ある 部屋の中では、男が険しい表情を浮かべて 本を読んでいた。

部屋の中には、様々な 資料が揃つており 人々の 情報が、収まられている。教師もあれば 役人や一般人にたわいもない 子供のことまで 事細かく 載せられていた。

その内容によつては、色々と助かることも少なくなく 仲間との情報手段にも使えるものだ。

「偶然 あいつらが、掃除していく 発掘した 書物だと思つていたけど…… わ？」

全部 使えるものばっかりだつたんだよな？
まあ 整理するのは、骨が折れたけど。

にしても…… 本当に、詳しく 調べ上げているな？

ベンつてば 本当に、情報収集の天才だつたんだ。

それを 引き継いでいるのも あの人の娘なんだし？

血の繋がり つていうのは、怖い 怖い「男は、苦笑しながら 呟いた。

そして どこか 悲しそうな表情を浮かべてしまつてゐるようだ。

「けど……まさか とは、思つけど。

今回も 危介なことになるかもしない。

前回は、失敗に終わったかもしれないけど 連中は、色々とするだろうし…… 邪魔もしてくるはずだ」

男は、訝しげな表情を浮かべて 溜息をつく。

その視線の先には、ある事項が、資料の中に 納まつてゐる。

「多分…………この前の一件は、他のお仲間の耳にも入つていいはずだ。

ずっと 沈黙を守つっていた帝王が、突然 その影を明らかにした。平和だと思われていた世界に 間が出来たということは、動き出すキッカケになるかもしれないんだし。

過去の資料からして 警戒するに越したことは、ないはずだ」 男は、

資料と睨めっこを続けながら 呟いた。

資料の中には、前回の詳細も収められている。いつの間にか 事件と遭遇してしまっていた 知人から話を聞きだし 先日 内容をまとめたばかりだった。

「前回は、急なことでもあつたから あまり 巻き込まないようにするつもりで協力してもらつたけど そんなこと 言つていられなかもしれないな？」

彼女からの話によれば ちょっと 危介なことになつてしまふかもしれないらしいし」男は、息をつきながら 呟く。

その表情は、髪だらけの顔で わからないうが 纏っている空気が、緊迫しきつている様子を伝えてきているようだ。

ふと 背後の扉がゆっくり と 音をたてながら 開く。

「あら 珍しいじゃない？

アンタが、それを見ているだなんて……ね？

いつもは、他のみんなに連絡を入れることが、主になつてきているようだつたけど？」女は、苦笑しながら 言つた。その言葉に 男は、息をつきながら 後ろに振り返る。

「まあ そつちの方も、ちゃんとするつて。

ちょっと 気になる事が、あつてね？

去年の事もあるし…… また 何かが、起つるかもしないだろ？少しでも 力になれたら いいかな？」 って 思つてさ？

過去の事件について 調べてみているんだ」

男は、そう言いながらも 手の中にあるものに 視線を走らせていつているようだ。

そんな男の様子に 女は、息をつきながら 部屋の中へと入つてくれる。

「気になる事 つて？

もしかして…… 何か 心当たりが、あるんじゃないでしょうね？」

去年は、私の知らないうちに あの子達に協力を要請していたでしょう？

今年は、そう 簡単に行動に移せると思わないことね？

ほお～ら……吐いてしまった方が、楽なんじやないかしら？」

女は、そう言いながら 男へと迫つていった。

そんな女の様子に 男は、後方へ下がつていつてします。

「別に 確証があるわけじやないんだけど？」

それに そういう情報に関しては、姉さんの方が詳しいんじやないの？

僕は、ただ 単に 前回のことからして……連中が、何かを仕掛けてくるんじやないか って 考えただけなんだから」 男は、肩をすくめながら 言つ。

「あつちからは、何の連絡もないわ？」

あるとすれば 体を大事にしろつてところかしら？」

私は、別に 命に関わる病気を持つているわけじやないのにね？ まあ 他のみんなのように 戦力外にされているのは、悔しいかも しれないけど」 女は、苦笑しながら 呟いた。

その言葉に 男は、悲しそうな表情を浮かべて 唇を噛み締めてしまつているようだ。

「あら～？ 苛めすぎちゃつた？」

確かに 悔しい事は、多々 あるかもしねいけど……別に 気にしているつもりはないわ？」

これでも ちゃんと 割り切つているんですからね？」

私は、自分の限度を知つた上で 出来ることだけをするつもりなんだから」 女は、呆れたように 溜息をつきながら、言つた。そんな女の様子に 男は、苦笑してしまつているようだ。

「本当に姉さんは、強いッ！」

とこうよつ…… 僕の周りにいる 女性陣の強いこと。

この前 デイブに話があつたから 家に行つたらさ……？」

セーラに怒鳴り飛ばされているところで 僕は、その間 5つ子のベビーシッターをしていたんだから。

リーフも、何気に ドリーに頭が上がらないらしいからね？」 男は、

息をつきながら 言う。

その言葉に 女は、訝しげな表情を浮かべてしまつてゐるようだ。

「一応 事情は、話しておいたんでしょう？」

これから……どれだけの危険が、この世界に 付きまとつてしまふのかを」

神妙な表情を浮かべて 女が言った言葉に 男も、険しい表情を浮かべて 頷いた。

「ああ 話した。

といふか……話しても話さなくとも 巻き込んでしまう可能性は、大だつたんだけどね？」

暗黒の時代の頃を考えれば 連中は、家族や友人を 齧迫の人質として 当たり前のように利用したんだから「男は、溜息をつきながら 言う。

その発言を聞いて 女の顔が、曇つたようだ。

「あの男が、完全に復活すれば……また 大勢の命が犠牲になつてしまつわ。」

私は、もう 誰かが傷つく姿は、見たくない。

ただの自己満足にしか思われないかもしれないけど どうしても……ね？」

その日 折角の誕生日 だというのに ハリー・ポッターは、面白くない 1日を過ごしていた。

初めて知った両親が過ごしたという ホグワーツ魔法学校での生活は、12年間 普通の子供として 過ごしていた ハリーにとって 窮屈でしかないのだ。

その上 ホグワーツに入る以前よりも ハリーにとつての自由は、制限されていってしまっている。

ハリーは、その状況に対して 尚更 心が沈んでしまう。

そんな少年の様子に気が付いているのか ダーズリー夫婦は、今までなかつたくらいに ハリーに対する扱いが、酷くなっているようだった。

ただ 従兄のダドリー・ダーズリーは、何かと励まそうとしてくれているようだ。

食事の時も、学校での友人について 色々と教えてくれる。

「フイリップっていう名前なんだけどさ?

両親は、赤ん坊の時に亡くなつたらしくて お姉さんと一緒に孤児院で育つたんだって。

将来の夢が、お菓子職人らしくて すっごく 料理が上手いんだ。クリスマスには、うちに遊びに来て ママの大好物だったもんだから……大歓迎されていたよ

楽しそうに語る ダドリーに ハリーもその光景が思い浮かぶようだった。

けれど ダーズリー夫妻は、その様子にも 何かを疑う考えしか持ち合わせていないようだ。

「パパとママってば、お前が魔法で何か動物に変身させるんじゃないか、って心配で堪らないんじゃないか？」ダドリーは苦笑しながら言つ。

その言葉にハリーは、呆れたように溜息をついてしまった。

「確かにハグリットが忠告していなかつたっけ？」

ホグワーツに一度入学したら、17歳になるまで、学校外では魔法が使えない、ってさ？」

僕のお母さんが、入っていた学校なんだから、知つてははずなのに。

変な偏見まで持たれちゃつていいようだしさ？」「ハリーは苦笑しながら言つ。

「色んな事が、ありすぎて忘れちゃつているんだよ。

家に泥棒は、入るしママの知り合いからは、何度も何度も連絡が、入つてゐるみたいだつたしさ？」

それに最後にや……ハリーが、学校で大怪我したらしいだもんな？

それ聞いた時……顔を真っ青にさせていたよ？やっぱり、心配していたんだろうね？」ダドリーは、息をつきながら咳いた。

「ああ……連絡が、入つていたんだ？」

僕らが終業式の前に、仕出かした事。

道理で駅まで迎えに来てくれた時……居心地が悪い空気が漂つていたんだね？」ハリーは、肩をすくめながら言つ。

少年の言葉にダドリーは、にんまりと笑つて“ああ聞いた”と溜息を一つ。

「何かハリーの両親を殺した、悪い奴が実は、生きていたんだつけ？」

それで、そいつの崇拜者が、主人を蘇らせようとして何とかの石つていうのを手に入れようと奮闘してたんだう？」「…………ハリー達は、それを阻止したんだっけ」ダドリーは、一つ思い出しながら、呟いた。

その言葉に、ハリーは、驚きを隠せないような 表情を浮かべてしまっているようだ。

「何で そんな詳しく知っているの？」

確かに 間違つてはいけど、話していないと思つただけだ？

それに 学校だって そんな簡単に 内容を話しあわせがないもん」

ハリーは、目を見開きながら 言つ。

その言葉に ダドリーは、苦笑を堪えてこらめりみつだ。

「ファイルが、知らせてくれたんだよ。

何かと わかりやすい、説明をしてくれていたけど 同じ知り合いらしい人に、その話をしている途中に見つかって 説教されていたな

ダドリーは、そう呟きながら 思い出し笑いをしていく。

ハリーは、従兄の話を聞き 驚きを隠せないでいた。

そんな少年の様子に ダドリーは、不思議そうな表情を浮かべてしまっているようだ。

「ハリーさ？」

ホグワーツから、帰ってきてから 何か……ソワソワしていいないか？

パパとママが、ヘドウイックを籠の中にも、閉じ込めちゃつているから 手紙は、届けられないんだろう？

ロンやハーマイオニーからも 手紙は、届いていないようだし

ハリーは、ダドリーの言葉に 悲しそうな表情を浮かべてしまつて いる。

そんな従弟の様子に 戸惑いを隠せない表情を浮かべてしまつて いるらしい。

ハリーは、ダーズリーの家に戻つてから ずっと、ロンとハーマイオニーからの手紙を 待ち望んでいた。

けれど 何週間経つても ふくろうが窓を叩く事はない。

その様子に 落胆する日々を ハリーは、送つていたのだ。

ダドリーは、そんなハリーの様子に 心配そうな様子を見せてくれ

ているようだつたが、ダーズリー夫婦は、ハリーのそんな心境に付け入るかのように、嫌味を言つばかり。

「仕方ない、つてことは、わかっているよ？」

「だって……伯父さんと伯母さんにとつたら、僕は、邪魔者でしかないんだ。つてことは、わかつてゐるし。」

現に……ホグワーツに戻つてから、前以上に……厳戒態勢になつてゐるようだからさ？」「ハリーは、溜息をつきながら、言つた。

「けど、何だか、異常なんだよな？」

特にママなんて……ノイローゼになつてゐるような感じだしさ。パパも、前にも増して……難しい顔をしちやつてゐるし。

何だか、嫌になつてしまふんだよ！」

ダドリーは、そう言いながら、溜息をついてしまつてゐるようだ。

「そういう、ダドリーだつて。

こんな風に、話は、しに来ても、魔法に關しては、反対なんじやないか」ハリーは、息をつきながら、呟く。

ハリーの言葉に、ダドリーは、呆れ返つたような表情になつてしまつてゐるようだ。

「まあな？」

「だって……間違いで、魔法を掛けられかけつても、困るしさ？　そういうえば……フイリップが、クリスマスに來ていた時に、お前のお袋さんの話が、出たでぞ？」

従兄の言葉に、ハリーは、目を輝かせたような、雰囲気になる。そんなハリーの様子に、ダドリーは、聞いても、面白くないのに、と苦笑してしまつてゐるようだ。

「えつとな～？」

何でも、ママが、チョコレートが大好物なの、知つてゐるだひつ？・ダドリーの言葉に、ハリーは、『うん』と、疑問符を浮かべながら頷いた。

確かに、伯母のペチュニアは、部類のチョコレート好きなのだ。デザートなどには、必ず、チョコレートを、口に含んでいる姿を何

度も見ることが、出来ているのだから。

「ハリーのお母さんが、ホグワーツから戻ってきて 初めてのお土産だったのが、蛙の形をした チョコレートとだつたらしい」

「ああ……『蛙チョコレート』のことだね？」

実は、お土産に持つて帰ろうかと思つたんだけど……ホグワーツで友達になつた子に 蛙が苦手な人には、お勧めできない品物だよつて 言われたから 止めたんだけど

ハリーの言葉に 従兄は、”それで正解だよ”と 苦笑気味。

「実は、その時に ママの幼馴染だつた人が、ウツカリ 本物の蛙に変えたらしいんだ。

ママは、蛙が苦手だから…… 大騒ぎになつて。

それ以来 ハリーのママからのお土産は、絶対 受け取らなくなつちゃつたんだつてさ」ダドリーは、息をつきながら 言う。

ハリーは、話の内容に 苦笑しながら、頷いているようだ。

その時 扉の外から、ノックの音が聞こえてくる。

「今日 とても 大事なお客様が来られる事になつたの。

だから…… 2人共 出でらつしゃい？」ペチュニア・ダーズリー

は、どこか 神妙な表情を浮かべて 言つ。

その言葉に ハリーとダドリーは、顔を見合させて 頷いた。

2人の様子に ペチュニアは、訝しげな表情を浮かべてしまつてゐるようだ。

「とにかく……ダドーちゃんは、よそ行きの服に着替えて？
ハリーも その汚い服を、着替えなさい！」

まるで ちゃんと 洗濯してあげていないようじやないの！」

ペチュニアは、そう言い残して 忙しそうに 駆け出していった。
その後ろ姿を見送つて 2人の少年達は、苦笑しながら 顔を見合わせてしまつてゐるようだ。

「多分 パパの上司が、来るんだよ。

何か 出世するかもしないんだって。

元々は、アントノヴァ先生の奥さんとの関わりで 今回の食事会が、

実現することになつたんだけどね？

パパは、あの性格だから……自分の能力のお陰だと思つて 張り切つているんだ」ダドリーは、息をつきながら 呟いた。

そんな従兄の様子に ハリーは、不思議そうな表情を浮かべてしまつている。

「どうして……そんなに 憂鬱そうな顔をしているの？」

伯父さんが出世するなんなら もつと、誕生日プレゼントかが いいものになるから……嬉しがるんじゃない？」ハリーは、首を傾げながら 言つた。

その言葉に ダドリーは、悲しそうな表情を浮かべて 濡息をついてしまつているようだ。

「だつて……何だか いい感じは、しないんだよな～？」

今ままでも 充分、幸せなんだし。

まあ 不満は、あるかもしねいけど。

それが、当たり前になつてきている分……」今まで いいような 気がするんだ。

何かが変わつていいくと 全部 おかしくなつちゃう気がしてさ? 環境も 人間関係も……」ダドリーは、肩をすくめながら 言つ。

ハリーは、そんな従兄の様子に 思わず、苦笑してしまった。

ダドリーは、ハリーのそんな様子に どこか 訝しげな表情を浮かべてしまつているようだ。

「まあ 今日は、元々 コンラッドが来る予定にもなつていたんだ し 悪いこと続きじゃないだろう?

その後は、ソフィーが料理をいっぱい持つて 遊びに来るらし……

バチンッ！」

その時 窓の外で 何かが、盛大な音を立てて 落ちてきたりしい。

振り返ると 窓の外には、大きな目の人不思議な生き物が、その場に立っていた。

その姿を確認して ハリーとダドリーは、驚きを隠せないまま。窓の外にいる ソレは、2人のそんな様子に 神妙な表情を浮かべたまま 部屋の中へと入ってくる。

「ハリー・ポッター……」

大きな目をした ソレは、ゆっくりとした 動作で部屋の中に入ってきた 小さな口を開く。

ハリーは、知りもしない 生き物に 自分の名前を呼ばれた事に対しても 驚きを隠せなかつた。

ダドリーも、近づいてきている生き物に 訝しげな表情を浮かべてしまつているようだ。

「ドビーめは、ずっと 貴方様にお目に掛かりたかったッ！」

ハリーとダドリーは、壁伝いに 机の方にじり寄つて 崩れるようにして 椅子に腰を下ろす。

眼鏡を掛けた少年の近くの椅子の側には、鳥籠の中で眠る ヘドウイッグが。

この家の中で異質な存在のカレは、ゆっくりとした 動作で ”ご紹介が遅れました”と 深々と頭を下げる。

「屋敷しもべのドビー と 申します」

ドビーの様子に ハリーは、戸惑いを隠せない表情を浮かべて ダ

ドリーと顔を見合わせるしかないようだ。

この光景を伯母夫婦に見られでもしたら 今以上に とんでもない事になってしまふだろ？

「屋敷しもべ って 魔法界の妖精？」

ハリーの言葉に ドビーは“左様で ござります”と お辞儀した。ダドリーも、驚きを隠せないまま その様子を、見守つているようだ。

「とにかく 立ち話もなんだし…… 座つて？」

その発言を聞いて ドビーは、目を大きく見開き 突然 その場に蹲るようにして 泣き出した。

ハリーとダドリーは、その大袈裟な泣き方に ハラハラだ。

「す 座つてだなんてッ！」

一度……誰にも……！」

ダドリーは、目をパチクリさせながら “頭 大丈夫か？”と 本気で心配している。

「今まで 誰かに 椅子を勧められたりとか しなかつた？」

普通なら ありえない事じやないか」

その問いかけに 妖精は、”しもべ妖精は、奴隸ですから”と 悲しげな顔になつた。

「中には、対等に扱つてくださる 魔法使いや魔女も存在しております。

けれど それは、魔法界で 異質な存在と位置づけられてしまう」
そう言い終えると ドビーは、突然 立ち上がって 前触れもなしに 窓ガラスに向かつて 自分の頭を打ちつけ始めたのだから

ハリーとダドリーは、呆気に取られてしまつたようだ。

「ドビーは悪い子ッ！」

ドビーは悪い子！

2人の少年は、下の様子に神経を集中させながら 何とか ベットに座らせる。

眠っていた ヘドウイッグは、その騒ぎに目を覚まして 鳥籠の格

子を羽で激しく打ちつけ始めたらしい。

「ドビーは、自分で お仕置きをしなければならないのです。

自分がお仕えしている 「ご主人様やその家族の悪口を言つてはならない。

ドビーは、屋敷しもべ妖精…… 1つの屋敷 1つの家族にお仕えする運命」

独り言のような発言に ハリーは、首を傾げた。

「君が使えている魔法使いは、君がここに来たこと…… 知つているの？」

もしかして 命令されて？」

興味がそそられた事を聞いただけなのに 妖精は、世にも恐ろしいことを聞かれたかのような顔だ。

「ドビーめは、こうして お目に掛かりに参りましたこと 厳しくお仕置きされなければならないのです。

お屋敷に戻りましたら オープンの蓋で 量耳をバチンと しなければならないのです。

「ご主人様に知られてしまえば それこそ……」

「だけど そんな風に お仕置きしていたら それこそ そのご主人様に 気が付かれちゃうんじゃないのか？」 ダドリーは、暴れている ヘドウイッグを、猫じゃらしでからかいながら 呟く。

従兄の質問に ドビーは、” 大丈夫です” と 自信満々。

「ドビーめは、いつも 何だかんだと自分でお仕置きをしていないといけないのです。

以前は、お嬢様がお止めに入られておりましたが 今は、それもなく ご主人様は、勝手にお仕置きさせてているのです。

時々 お仕置きが足りないと おっしゃられまして……

「どうして 家出しないの？」

普通なら 逃げてもおかしくないと 思うんだけど？」

ハリーは、心の底から 目の前にいる 妖精が、可哀想でならない。自分よりも、蔑まれた存在がいただなんて……。

「屋敷しもべ妖精は、『主人様自身の手で 開放されなければ 自由にはなれないのです。

我々は、魔法使いの財産として 1つの屋敷なきてはならない 家具という名の奴隸。

ご主人様は、ドビーを自由にするはずがありません…… 知りすぎているのです」

「僕に出来ることが、あればいいんだけ……」

ハリーは、そう言つた途端 本能的に『しまつた』と 思つた。ドビーは、またしても 感謝の雨といふ名の涙を流しながら 泣き始めたのだ。

「ハリー・ポッターが、『何か出来ないか』と ドビーに聞いて下さったツ！」

貴方は、偉大な方だと聞いておりましたが あの方と同じく こんなにも 優しい方だつたなんて……ツ！
しかも 名前を呼んではいけないあの人には 勝つたことをおっしゃられないだんて 何て 謙虚な方～ツ！」

オンオンと 泣いている ドビーに ハリーとダドリーは、疲れ果ててしまう。

階下から 呼ぶ声が聞こえ 徒兄は、少しでも 下の注意を逸らすと言ひながら 部屋を後にしたらしく。

「ドビーめは、知っています。

ハリー・ポッターが、闇の帝王と4週間前に 2度目の対決をし またしても（・・・・）逃れた と。

貴方様は、何度も危機を切り抜けられる 勇猛果敢なお方ツ！

ドビーは、この度 貴方様をお守りする為 …… 警告口しに参りました！

ホグワーツには、行かないで下さい！」

一瞬 部屋の中に静けさが広がつた。

「命に関わる 危険が、ホグワーツで起こってしまうのです」

ハリーは、我に返ると “そんなの無理だツ！” と 声を張り上げ

たが、すぐに囁く声になつたようだ。

「僕は、戻らないといけないよ。

だって、9月1日に新学期が始まるんだから。

僕にとっては、ホグワーツほど心休まる場所が無い。あそこでは、僕の知らないことを知ることが出来る。どうして……そんな事を言うの？」

「理由は、申し上げられませんが、恐ろしい罠が、待ち受けているのです」

真剣な言葉に対し、眼鏡を掛けた少年は、首を振る。

「どんなに危険なことがあるにしても、僕は、ホグワーツに戻る。ここが死ぬほど屈辱的な場所というわけじゃないけど、僕にとっては、居場所は、ホグワーツなんだと思っているんだ。

あそこには、友達もいる」

「手紙もくれないのにですか？」ドビーは、真剣な表情を浮かべて、言つ。

その言葉に、ハリーは、驚きを隠せず、息を呑む。

ドビーという、屋敷しもべ妖精は、そんな少年の様子を、食い入るように、見つめている。

「どうして、知っているの？」

僕は、使い魔が籠の中に閉じ込められてしまつて、手紙は出せないけど……2人からは、それにに対する手紙も来ないのに、ハリーは、訝しげな表情を浮かべて、ドビーを見つめながら、呟いた。

ドビーは、そんな2人の様子に、肩をすくめながら、指を鳴らしたようだ。

すると、妖精の手の中には、何通もの封筒が出てくる。

それを見つめて、ハリーは、驚きを隠せないまま、目を大きく見開いてしまっているようだ。

ドビーが差し出してきたものは、ロンとハーマイオニーが、自分に宛てくれていた手紙の数々だったのだから。

「何で……僕の友達の手紙を隠す必要がある？！」

僕は、ずっと 手紙を待っていたのにッ！」

ハリーは、悲しそうな表情を浮かべて 手紙を取り戻そうとしたようだ。

けれど 妖精は、その瞬間を察知していたのか 寸前で、ベットから飛び退いてしまう。

「ホグワーツに戻らないとドビーと約束したら 手紙を差し上げます」

ドビーの言葉に 少年は“嫌だッ！”と 怒っている。

「それは、僕の手紙から送られた 大切な手紙なんだ！！」

その答えに 妖精は“そうですか”と 哀しげな表情を浮かべた。

「でしたら ドビーは、こうするしかありません」

次の瞬間 屋敷しもべ妖精は、矢のようにドアに飛びつき 階段を

全速力で下りていってしまったようだ。

その頃 ウィーズリー家では、ロナルド・ウィーズリーが訝しげな表情を浮かべて 窓を見つめていた。

赤毛の少年のそんな様子に 他の家族は、顔を見合させて 溜息をつくばかりだ。

「今まで そんな風に、難しい顔をしているんだ。

さつき ハロールが、手紙を持っていったばかりだろう?」 パーシー・ウイーズリーは、息をつきながら 言う。

兄の言葉に ロンは、肩をすくめてしまつているようだ。

「手紙書く って 約束したのに……ハリーから 全然 返事が

来ないんだ」 ロンは、悲しそうな表情を浮かべて 言つ。

そんな弟の様子に パーシーは、困惑したよつに 他のメンバーに、視線を走らせる。

他の家族も、戸惑いを隠せないまま 顔を見合わせてしまつているようだ。

どこか 心配を隠せないような 表情を浮かべて ロンを見つめている。

その時 窓の外から、ふくろうが鳴く声が……。

ロンは、その鳴き声に 飛び上がるかのように、飛び出した。

そんな弟の様子に 残されたメンバーは、息をつきながら 苦笑してしまつていいようだ。

「けどさ……おかしくないか？」

赤毛の青年の言葉に 一同の視線が、ウイーズリー家の長男・ビル・ウイーズリーに 集中した。

「1ヶ月も 連絡が取れないなんて。

4週間前の出来事のこととは、誰もが周知のことなんだろう？

万が一……」

ビルは、途中で 言葉を切つてしまつたようだ。

その視線の先には、険しい顔の母親の姿が……。

しばらくして 赤毛ののっぽな少年が、肩を落としながら 戻ってきた。

「ロン……ハリー・ポッターからの手紙の返事が来たんじゃなかつたの？」

ウイーズリー家の末っ子長女の ジネブラ・ウイーズリーは、不思議そうな顔。

その言葉に ロンは、悲しそうな表情を浮かべてしまつているようだ。

「ハーマイオニーから。

マグルの方法で 手紙を送つても 返事が来ないらしい」 ロンは、神妙な表情を浮かべて 言つ。

赤毛の少年の言葉に 一同は、驚きを隠せない様子で 顔を見合わせた。

「まあまあ それでは?

彼方方「夫婦は、うちの顧問弁護士をしている コンラッド・モーガンや妻の友人のソフィア・スチュワートの古い友人だったんですねか。

これは、驚きましたな?

彼は、私が通っていた大学の同期で その才能を買い 顧問弁護士を頼んだのですよ。

まさか このような共通の友人がいるとは」 バーノン・ダーズリーは、意外そうな顔で 呟いた。

その言葉に 訪問者の夫婦は、微笑んだ。

「ええ そうなんですよ。

学年は、違つたんですけどね?

Mr・モーガンやMrs・とは、幾度となく 校内でも顔を合わせていました。

彼らは、学校の中ではある意味目立つた存在でしてね?

色々な意味で 他の学年の生徒からも信頼されていましたよ」

「コンラッド ソフィーはお元気?

先日 懐かしい手紙が届きました 昔のこと思い出しましたわ? 家にあつた写真のほとんどは、あの子の為に 差し上げたのよ。貴方の所にも、彼が訪れたのではなくて?

お元気にしているのかしらね?」

その質問に向かいのソファーに腰を下ろしている顔立ちの整つて いるきつちりとした服装の男は“元気です”と 微笑む。

「もしかしたら、メイン夫婦の訪問中に やつて来るかもしだま

せんよ。

その頃には、仕事のお話が終わっていたているとありがたいのですが。

ソフィアが、ここに来てしまつと 商談どころじゃなくなつてしまふ氣がするのでね？

あれで、あの仕事が続けられるのが嘘のようです。

あちらに「迷惑をかけていなければいいのですが……」

苦笑氣味にな言葉に リビングにいる面々は、笑みをこぼす。ダドリーは、少し離れた席で 何度も、上の天井を見上げながら余所行きの服に身を包み、ソワソワしていた。

上の部屋のハリーとドビーのことが、心配で溜まらないのだ。「あら 息子さんは、何やら 気になつてゐることがあるようですね？」

メイソン夫人は、一ツ口リと微笑みながら ダーズリー家の子供に視線を向ける。

自分に声を掛けられていることに気が付き ダドリーは、肩をすくめてしまつ。

「いやあ 気になさらないで下さい。

息子は、まだ私の行つている事業に興味がないようとしてね？妻の作った傑作のケーキが、気になつて仕方がないのでしょうか？」

ダーズリー氏の発言に メイソン夫妻は、朗らかに微笑む。

「ところで 夫人の妹さんの忘れ形見の息子さんは、留守なのですか？」

「何だつたら 一緒に 食事をしたいものなのだが？」 メイソン氏は、部屋の中を見回しながら 呟いた。

その言葉を受けて ダーズリー夫妻は、固まつてしまつていよいよだ。

「いえいえ ちょっと 酷く精神不安定な部分があるんですよ。知らない人に会つと 気が動転してしまつ部分がありまして。あまり粗相をさせないために 今は、自分の部屋に下がらせており

ます」

バーノンは、冷や汗を搔きながら 取り繕う。

ペチュニアは、それを聞きながら 唇を噛み締める。

メイソン夫妻は、それを聞いて どこか眉間に皺が寄つてしまつて いるらしい。

ふと コンラッドは、自分の目を疑つた。

何と 自分の座つている位置から見える台所で 山盛りのホイップ クリームとスマレの砂糖漬けされたデザートが、天井近くで浮遊しているのだ。

弁護士である友人の視線に気が付いたのか バーノンも、そこに視線を向ける。

すると ケーキは、独りでに浮かんだまま進み出だした。

そして、部屋の扉が開くと同時に……ガシャンッ！と 心臓が止まるような音を立てて 床に落ちたのだ。

皿は、割れ その音に入り混じるかのように、微かにパチン と 音と共に 何かが姿を消す。

傑作だつたケーキは、ちょうどビダーズリー家を訪問した人物の頭のてつぺんから足の先までグチャグチャになつてしまつ。

ハリーは、リビングと台所を繋ぐ扉の前で ショックで硬直してしまつていた。

「ソフィアッ！」

大丈夫か？怪我は？」

第一声を上げたのは、コンラッドだ。

名を呼ばれた女性は、辛うじて見えていいる顔から溜息をつき 顔中にこびりついているホイップクリームを拭う。

お皿の破片などは、幸いにも 降り注いでいた物の、怪我の要因になつていなかつたらしい。

その様子を確認して 一同は、安堵の息を漏らす。

ハリーは、目だけで射殺されるのではないかと思いながら 伯父の殺氣の籠つた視線とモップを受け取り、キッチンの床を擦り始める

ことに。

「怪我はないけど ケーキが、台無しになってしまったわ？
もしかして……手品の練習でも、していたの？」

確かに コレは、余興としちゃ 楽しいかもしないけど……ち
ょつと いただけないわ？」

実行するのなら ちゃんと 練習を事前に行っておかないと
どこか悪戯っぽくジョークをかましたペチュニアの友人・ソフィア・
スチュワートの一言によつて その場は、何とか取り繕われた。
「ソフィア……貴女は、着替えないと。

本当にごめんなさいね？」

シャワー室は、あつちよ？

服も、用意するから……」

ペチュニアは、本当に心から申し訳なさそうに思いながら 階段を
駆け上がって、何やら 普段着ているものとは印象の全く違つてい
る 品な服を手に降りてきたようだ。

「ありがとう。

まさか、わざわざ人の家に来て シャワーを借りることになつてしま
うだなんてね？」少し赤の入り混じった髪色をしている女性は、
苦笑しながら クリームまみれのまま、リビングから足を運ぶ。
その後 先ほどのハプニングが、嘘のように 商談は、いい方向に
進んでいく。

一番の貢献者といえば やはり、バーノン野会社の顧問弁護士を務
めている 手腕のコンラッジのお陰だろう。

だが それも 何とか商談成立の可能性が出てきて 食後のミント
チョコの入った箱をみんなに回していく時まで。

何と 巨大なふくろうが1羽 中庭の窓から舞い降りて 皆が囲
んでいたテーブルの上に手紙を落としたのだから。

メイソン夫妻は、何とも思つていなかつたように ダーズリー
夫妻は、さらに緊張の糸が切れたようにパニックになつてしまい
商談は、成立しないまま 夫妻に帰つてもらうことになつてしまつ。

あまり 長居しない方がいいと踏んだのか コンラッドやソフィアも家を後にしてしまつたらしい。

手紙には、ハリーにとつて 最悪の内容が記されていた。

ポッター殿

今夕 9時12分、貴殿の住居において『浮遊術』が使われたとの情報を受け取りました。

ご存知のように卒業前の未成年魔法使いは、学校の外において呪文を使用することが許されておりません。貴殿が再び呪文を使用すれば 退学処分となる可能性があります。（未成年魔法使いに対する妥当な制限に関する1875年法、C項）

念のため、非魔法社会の者に気づかれる危険性のある魔法行為は、国際魔法戦士連盟機密事項保持法第13条の重大な違反となります。

休暇を楽しまれるよう！

敬具

魔法省

魔法不適正取締り局 マファルダ・ホップカーカ

その手紙を読み終えて、顔を上げてみると バーノンは、どこか虚ろな顔をして ニヤニヤ。

「わしは、小僧 お前を閉じ込めるツ！」

お前は、あの学校に戻れない

戻ろうとして魔法で逃げ出そうとすれば この手紙を送ってきた連中は、お前を退校にするんだろう？

そう言い放つて ダーズリー伯父さんは、ハリーを2階へと引き摺つていったようだ。

ダドリーとペチュニアは、そんな父（夫）の様子に、驚きを隠せない。

「パパ、一体、どうしちゃったんだろう？」

別に、今までに、こんなにまで異常なことをしたことがないだろ？
メイソンさん達だって、変に思つてはいる風もなかつたんだから。

次の約束だつて、取り付けていたみたいだし

息子の咳きに、母は、不安を隠せない。

「まるで、誰かに操られているようだわ？」

消え入るようなペチュニアの囁きに、ダドリーは、驚いたように目を見開く。

けれど、息子の視線を感じて、母親は、何事も無かつたかのように後片付けをする為、ソソクサとリビングを後にしてしまう。

「一体、どうなつているんだ？」

まさか、あの変てこな妖精が、あんなことを仕出かしたんじやないだろうな？

だつて、ハリーに警告しに来ていた。

ホグワーツへ戻るなつて。

まさか……その為に、あんなフザけたことをやつてのけたんじや」

1人残されたダドリーは、思案するように、首を捻つた。

「それに、あのママの言葉だ。

操られているようつて、誰かが、魔法で、ハリーを閉じ込める為にパパに何かをしたってことなのか？」

その後、バーノンは、狂つた行動に出た。

何と、翌朝に人を雇い、部屋の窓に鉄格子をはめ込み、部屋の唯一の出入り口である扉に『餌差し入れ口』を取り付け、1日3回わざかな食事を運び、朝と夕にトイレに部屋を出してもらえるにしても、それ以外、部屋に閉じ込められる結果となつてしまつたのだから。

しかも、何か警戒されてしまつているのか、ハリーとダドリーは、その閉ざされた扉の前で、2人だけで話すことも許されないので。

「どうしても おかしいわ？」

だって……あのハリーがよ？！

ロンなら ともかく ハリーが、手紙の返事を返してくれないはずないわ？！」栗色の髪をした少女は、訝しげな表情を浮かべて 言つた。

娘の言葉に 両親は、困惑を隠せない様子で 顔を見合わせてしまつて いるようだ。

その様子に ハーマイオニー・グレンジャーは、苦笑しながら 両親を見る。

「何度も 手紙を送つて いるのだけど 全然 収事が返つてこない の。

ロンにも その事について、さつき ふくろうを送つたところ。ハリーと音信不通になるだなんて 思いもしなかつた。

ホグワーツにいた頃じゃ そんな心配いらなかつたのに「ハーマイオニーは、悲しそうな表情を浮かべて 嘆いた。

「他のお友達には、その事について 聞いてみたの？」

母は、心配そうな表情を浮かべて 娘を見つめているようだ。

ハーマイオニーは、母の言葉に 悲しそうな表情を浮かべて、首を振る。

「同じ ロンドン市内に住む 友達には、色々と 聞いてはみたんだけど」ハーマイオニーは、小さく 涙息をつきながら、言った。そんな娘の様子に 父親は、心配そうな表情を浮かべてしまつている。

「確かに 郵便でも、送つたんだろう？」

けど 返事は、来なかつたのかい？

早かつたら そろそろ 返事が来ても おかしくないだろ？「父の言葉に ハーマイオニーは、神妙な表情を浮かべて 頷いた。

「まだ 来ていねえの。

けど ふくろうで、連絡が取れないんだもの…… 望みは、ないかもしねないわ？

明日は、マリーとアルと一緒に 住所を頼りに ハリーの家の近くまで 行こうかと思っているの。

もしかしたら お家で、何かが あつたのかもしれないでしょ？ 従兄の方は キングズ・クロスでもしゃべって 良さそうだったけど 伯母さん夫婦は、最低だつたもの

ハーマイオニーは、そう言いながら 心配そつた表情を浮かべてしまっているらしい。

そんな娘の様子に 両親は、神妙な表情を浮かべて 顔を見合させてしまつているようだ。

「伯母さんは、血が繋がつてゐるはずなのに…… ッ！」 ハーマイオニーは、唇を噛み締めながら 呟く。

少女の手は、力いっぱい テーブルを、叩きつけている。

そんな娘の様子に 両親は、顔を見合わせてしまつていた。

「でも ハーマイオニー？

どんなにキツイ言い方をしているからといって、酷い つて 決め付けてしまう というのも、どうかしら？

心配で堪らない つていう 気持ちも、あるかもしねないのよ？

それに ハリーは、校長先生がお決めになつた 家に 預けられたんでしよう？

だつたら 何か、理由があるはずよ？」

母は、苦笑しながら そう言つて ハーマイオニーの手を優しく包み込んだ。

その言葉に 父も、神妙な表情を浮かべて 頷いている。

「血の繋がりは、色々な意味で 大切かもしねない。

でも 生みの親より 育ての親 つていう 言葉もあるんだ。

たとえ 季は繋がっていなくても その絆は、計り知れない場合 だつてある。

現に ママは、実の両親を知らないけれど 育ててくれた夫妻は、優しくも 厳しくも 育てくれたんだ。

ハリーの伯母さん夫婦は、気持ちと裏腹なくらいに 天邪鬼になつてしまふかも知れない。

例えば その人を、想えばこそ でね？

その ハリーの伯父さんと伯母さんは、そうだつたり するんじやないかな？」

父は、そう言いながら ウインクしていく。

ハーマイオニーは、両親の言葉に “まさか ありえないわ？” と訝しげな表情を浮かべてしまつていてるようだ。

娘のそんな様子に 両親は、顔を見合させて 溜息をついた。

その時 インターホンの音が、鳴り響いた。

グレンジャー家の面々は、不思議そうな表情を浮かべて 顔を見合させる。

「一体 誰かしら？ こんな時間に」

ハーマイオニーは、訝しげな表情を浮かべて 時計を見つめた。

時刻は、もう 10時を過ぎよつとしている。

すると 扉の方から、母の 嬉しそうな声が聞こえてきた。

「まあ 久しぶりじゃない！」

全然 遊びに来なくなっちゃつたんだから。

ほら 上がつて、上がつて～！

今 主人と娘もいるのよ？

何年振りかしら？

何だか 懐かしいわ～？

あの頃に 戻つたみたいで。

それに ちょっと 聞きたいことがあるのよ

どうやら 母の知り合いが、近くまで来たから といふことで

訪問してきたようだ。

けれど 訪問者は、何か用事があるらしく 母と息を潜めて 会話をしている。

その様子に ハーマイオニーは、不思議そうな表情を浮かべて 事情を知っているであろう 父を見つめた。

父は、娘の視線に気が付き ニッコリと 微笑んだ。

「ハーマイオニーも赤ん坊の頃 会っているはずだよ？

覚えていないかもしないけど よく 遊んでもらっていたしね？ もしかしたら 向こうで 顔を合わせているかも知れなけれど…

…

父の言葉に ハーマイオニーは、驚いたような顔をしているが 思い当たる節を探そうと 首を捻っているようだ。

「あんまり 覚えていないわ？

それに、ママの友達 って 今まで あまり 会った事がないんだもの。

写真だって 残っていないでしょう？

もしかして メイベル伯母様 繫がり？」 ハーマイオニーは、神妙な表情を浮かべて 呟いた。

そんな娘のその言葉に 父親は、苦笑しながら 見守っているようだ。

しばらくすると 母親も、思わしくない顔で 戻ってきていた。妻の様子に 夫は、神妙な表情になり 視線を、娘へと走らせる。

「ハーマイオニー？

そろそろ 寝ないと いけないんじゃないかな？

明日は、その子の家まで、行くんだろう？」 父は、ニッコリと微笑みながら 言つた。

その言葉に ハーマイオニーは、訝しげな表情を浮かべてしまうが

“明日、寝坊してしまつわよ？” という母の言葉に 自分の部屋へと戻っていく。

グレンジヤー夫婦は、そんな娘の背中を見つめ 神妙な表情を浮か

べて、顔を見合っていた。

「至急 お義姉様夫妻に連絡を取らないといけなくなつたわ？」

妻の真剣な言葉に 夫は、眉根を寄せたようだ。

「けど もうきの話、どう思つ?

やっぱり 予想通り って 言つのかな?」 女は、神妙な表情を浮かべて 呟いた。

その言葉に 男は、訝しげな表情を浮かべてしまつて いるようだ。
「間違いない だろうな?

まあ そうなつて いる間は、間違いなく 安全だといつ事は、保障されているだろ? よ?

なんたつて 認識されていない、呪いなんだか。

あいつらからの話を聞いた限りでは、イマイチ 理解に苦しんだが
やつと 話が繋がつたわけだ「男は、呆れ返つた表情を浮かべて
呟いた。

女は、そんな男の様子に 小さく息をつく。

「その言い方 つて 他人事のようだけど?
確かに その通りかもしれないけど。

もつと 言葉を探しておかないと 前みたいに 冷たい つて 言われちゃうよ?」 女は、真剣な表情を浮かべて 言つた。

その言葉に 男は、呆気に取られてしまつて いるようだが すぐに
吹き出してしまつ。

男の反応に 女は、訝しげな表情を浮かべて 仁王立ちしている。

「言われなくたつて、そんな事 わかつているわ。

まあ 心配する 理由が、揃つて いる以上 様子見をした方が良い
のは、確かだろ? な?

このまま 行つてみるか?

ついでに あいつらのところにも、寄ろ? が。

変な厄介ごとを拾う事になってしまつかもしないがな?「

男は、そつ言いながら、どこか 面倒くさそうな表情を浮かべているようだ。

そんな男の様子に、女は、“真面目に、やらないと”と、険しい表情を浮かべていた。

女の視線に、男は、苦笑しながら、肩をすくめている。

「ちゃんと やるべきことは、理解しているぞ。」

勿論、今回の山についてもな?

今回は、行動を慎重にすべきだろ?」

下手すれば、前の時のように、犠牲者が出る。

不安の種は、一掃しないと」男は、訝しげな表情を浮かべて、呟いた。

「でしょ? ね?

こっちだつて、そんなものが、いつまでも、残っていたら、足元を掬われちゃう」女は、苦笑しながら、言つ。

その言葉に、男は、神妙な表情を浮かべてしまつていてるようだ。

「だが、あの子にとって、相当、堪える事なんじやないか? 今回の事なんて、特に……どんな罠が、待つていてるのか、定かじやない分」男は、どこか、悲しそうな表情を浮かべて、呟いた。
そんな男の言葉に、女も、息をつきながら、頷いている。

「かもしれない。」

でも、本人だつて、わかっているはずだから、言葉だけじゃない覺悟も、そろそろ、必要になつてくるんじやないかな?

多分、私達にとつても、心を改める、いい機会になるかもしれない」

女は、真剣な表情を浮かべて、呟いた。

ふと、頭に、何かが、落ちてくる。

その触れ具合に、女は、訝しげな表情を浮かべて、空を見上げた。

「どうかしたのか?」

男は、不思議そうな表情を浮かべて、女の顔を覗きこんでいるようだ。

「今 頭の上に ジュースが零れてきたの。
しかも これは、かぼちゃジュースだわ。

普通のマグル家庭じゃ 作らない飲み物なんだけど
女は、呆れた表情を浮かべて 髪の毛にこびり付いてしまった、ジ
ュースを ハンカチを取り出して、ふき取つていく。
「予測不可能なのは、連中だけじゃない ってわけだ」
男は、その言葉に溜息をつきながら 空に浮かぶ 影を 見つめて
いた。

少し時間を遡つて……。

ロン+ウィーズリーの双子は、夜空をドライブしていた。

「ねえ！！

ハリーの家まで 後 どれくらいなんだ？

ハーマイオニーが、念の為に つて 住所を教えてくれていたんだ ろう？」赤毛の少年が、ハンドルを握り締めながら 大声で 叫んだ。

フレッドの言葉に ロンは、水筒を片手に ポケットから メモを取り出す。

「もう少しで ハリーが預けられている ダーズリー家に着くはず。大きな家に 広い庭があるんだって。

けど ハリーが言つには、魔法使いの家に比べたら 負けるだろつ つてさ？」ロンは、苦笑しながら 言つた。

弟のその言葉に フレッドやジョージも、顔を見合させて 吹き出してしまうつているようだ。

「でも、すごいな～？

まさか 箸以外で、飛ぶ事になるだなんてさ？

それに、これなら 未成年者の規則には、捕まらないし」ロンは、興奮気味な様子で 真下の街並みを見つめながら 呟いた。

「お~お~い………… ちゃんと * まつて置けよ？

あんまり 身体を乗り出さないでさ？

この車を使って ハリーを迎えて行く つてだけでも ママのお冠は、目に見えている事なんだから。その上 怪我人が出でみろよ。食事抜きだけじゃ 済まされないかもしねー」ジョージは、真剣

な表情を浮かべて 言い放つ。

そんな兄の言葉に ロンは、思わず 手に持っていた水筒の中身を、零してしまった。

「うわあ…………」

ママ特製の かぼちゃジュースが～！」

赤毛の弟の言葉に フレッドとジョージは、溜息をつきながら “何 やつているんだよ”と 呆れ返ってしまっているようだ。

「ハリー…………もしかしたら、伯父さんと伯母さんに 酷い目に合わされているかも知れないから 持ってきたのに～」赤毛の少年は、今にも 泣き出しそうな表情を浮かべて 嘶く。

その言葉に フレッドとジョージは、顔を見合わせて 溜息をついてしまつていいようだ。

「「なつてしまつた事は、仕方がないつて」」 双子は、息をつきながら 言う。

ロンは、そんな兄 2人の言葉に 悲しそうな表情を浮かべて零れ落ちていく 液体を、見つめていた。

ウイーズリーの3人は、家族が寝静まるのを確認してから ハリーを迎えて行く という 計画を立てたのだ。

幸い ウイーズリーの父が以前 魔法をかけていた 車のことを思い出し 向かっている。

車には、マグルを見つからないよう 保護の魔法がかけられているらしく 空を飛ぶ 鳥達でさえ 存在に気が付いてない。

「とにかく 突っ走るぞ？」

さつさと ハリーを迎えて行って…… 家に戻るんだから。

ママの巡回時間までには、戻らないと…………な？」

フレッドは、そう言いながら ハンドルを、全開に きつている。 その表情は、真剣そのものになつているようだ。

「つてかさ？」

ジニーの奴 ハリーがいることに気が付いたら…… 飛び上がるんじやないか？

何かと 休み中 ハリーの話を 聞きたがっていたし。

昔から ハリーの熱狂的なファンだ。

実は、ハリーに送った セーターは、ジニーがママに頼み込んで
9月から 編んだらしいぞ?」ジョージは、ニヤニヤしながら 言つた。

その言葉に ロンは、少し 話しげな表情を浮かべてしまつて いる
ようだ。

「ジニーは、ただ ハリーの外側の話で 大騒ぎしているだけだろ
う?

僕だつて 最初は、そう思つていたかも知れないけども?

ハリーは、そんな風に 勝手に騒がれるの嫌がつて いるのに「ロン
は、肩をすくめながら 呟く。

ロンの言葉に ウィーズリーの双子は、顔を見合わせて 吹き出
てしまつて いるようだ。

2人のその反応に 赤毛の少年は、話しげな表情を浮かべて 睨み
つけて きている。

「ロニー坊やつてば 一つしか違わない 妹に ハリーを取られる
と 思つて いるのか?

まあ 精神年齢の方は、上なのは、確かだらうけど。
グリフィンドールの皆様方をみて いれば わかるこことだ」フレッド
は、笑いを噛み締めながら 呟いた。

その言葉に ジョージも、苦笑しながら 言葉を繋げたようだ。
「なあ」に 大丈夫だつて。

ハリーには、ハーマイオニーもいるし?

お前つて いう 親友もいるんだからさ?

心配する事なんて ないだろ?よ?

ジニーは、ミーハーなだけで しばらくすれば 普通になるはずだ。

何たつて 僕達の妹なんだからな?

まあ 初のご対面は、想像を絶するほど 驚くかも知れないけどな

?「ジョージは、苦笑しながら 言つ。

「さやあつて風に？

まあ そんな可愛らしい悲鳴を上げるかは、別として。ハリーの姿を見て 驚くのは、ジニーだけでなく ママもその類に含まれるだらうよ？」

ママとジニーは、性格が似ているからな？」 フレッドは、息をつきながら 呟く。

その言葉に ロンは、呆れたように 溜息をついてしまつてこるようだ。

「当たり前だよ。

ジニーは、ママのお人形さんだから」 ロンは、双子の兄達に聞けないよう 小さな声で、呟いた。

「お？ あれじやないのか？ ダーズリー家 つてこりのは」 フレッドは、何か見つけたらしく 苦笑しながら、言つた。

ジョージとロンは、顔を見合させて その先を、見つめた。そこには、ハリーが教えてくれていた ダーズリー家が、瞳の中に写っている。

表札にも『ダーズリー』と記されており、間違いないようだ。

3人は、顔を見合わせて 頷き合つた。

「ハリーの部屋は、どこなのか わかるか？

万が一の事を考えて 急いだ方が、いいかもしないし

フレッドは、首を捻りながら ロンを見た。

兄の質問に ロンは、肩をすくめながら 首を振る。

「多分 ホグワーツに来る前の部屋では、ない気がする。

確かに 階段の下の、倉庫だつたらしいんだけど。従兄のダドリーとか言う子が 部屋を新しくして、移るらしい とかつて、言つていたから。

ハリーも 部屋が代わったんじゃないかな？」 ロンは、首を傾げながら 呟いた。

弟の言葉に フレッドとジョージは、呆れたように 溜息をついてしまつているようだ。

「「おいおい ちゃんと 聞いておけよ」」

兄2人の言葉に ロンは、困惑を隠せないよう に 肩をすくめてしまっている。

「だつて 仕方が、ないじやないか。連絡を入れても ハリーからの手紙は、来ないんだしさ？」

ロンは、そう言いながら 悲しそうな表情を浮かべてしまっているようだ。

そんな弟の様子に フレッドとジョージは、呆れたように 溜息をついている。

「ねえ お客様がいるみたいだけど？」

ダドーの知り合い？」

その時 背後から、声が聞こえてきた。

振り返ると 少年が2人、立っているようだ。

「確かに……ハリーの学校の友達だよ。

キングズ・クロス駅で 紹介してもらつたし」

ロンは、何かを思い出したのか ”あ ハリーの従兄” と 小さく声を発す。

フレッドとジョージは、それを聞いて マジマジと 小太りな少年を見つめている。

「確かに……ロンだつけ？」

ロン・ウイーズリー。

丁度 良かつたよ。

ハリーの友達に連絡を取ろうと思つても どうすればいいのか 困つて いるところだつたんだ。

フィルにも話していたところなんだけど 変なことになつちゃつていてさ？」

ダドリーは、嬉しそうに 微笑む。

ウイーズリー兄弟は、驚いたように 顔を見合わせるしかない。

ハリーは、訝しげな表情を浮かべて 扇を見つめていた。

今日も 何もないまま 1日が、終わろうとしているようだ。

屋敷しもべ妖精のドビーがした 騒動のお陰で ハリーの自由は、ほとんど ないに等しい。

いくら ダーズリー夫妻に 弁解をしようと しても 聞く耳を持つてもうらず 挙句の果てに 鉄格子を嵌められてしまったのだから。

「ダドリーに頼んだら 手紙は、出せるかもしないけど。
問題は、それを、どうやって 頼むかなんだよね？」

しかも 手紙を出すにも、僕 2人の住所 知らないし。

ヘドウィッグは、倉庫の中に 閉じ込められちゃっているしなー？」

ハリーは、悲しそうな表情を浮かべて 溜息をつく。

その手には、前学期 ハグリットにプレゼントされた 両親のアルバムが納まっている。

写真の中にいる 両親は、今の状況のハリーの様子に 不思議そうな表情を浮かべながらも 笑顔を向けてくれていた。

「でも 良かった。

ホグワーツのものは、全部 ペチュニア伯母さんに没収されちゃつたけど これだけは、取られなくて。といつより 見逃された つていうのが、合っているのかな？

それとも 手にするのも、嫌だった とか？」

ハリーは、自分で言つておきながら 悲しい気持ちになつてしまっているようだ。

ホグワーツで落ち込むことがあった時は、主人の心境を読んで 使い魔のヘドウィッグが、慰めてくれるはずなのに
けれど 今は、狭い部屋の中で 1人きり。

この状況に ハリーは、少し 限界を感じ始めている。

「ホグワーツにいる頃は、寂しいだなんてこと ほとんど なかつた。

何だか 感傷に浸りそう。

いつも ロンやハーマイオニーがいて…… 他のみんなもいて、楽

しかつたのにな〜？

そういうえば、ダドリーは、今日、お姉さんが、ホグワーツに通つて
いるらしい友達に、この状況のことを相談してくれているんだっ
け？」ハリーは、息をつきながら、咳いた。

考えるのも、苦痛になってきた感覚になり、少年は、ベットに寝
転び、そのまま、夢の中に入ることに。

ふと、外からは、ガタガタと檻の鉄格子を揺する音が聞こえてきた
ようだ。

何事かと、目を開けてみると、月明かりが、窓の鉄格子を通して
差し込んでいた。

そして、誰かが、鉄格子の外から、部屋の中に捕らわれているハ
リーをジロジロ覗いていた。

ソバカスだらけの赤毛に、背の高い誰かだ。
そのパートを組み合わせて、少年は、その人物に行き当たる。

「ロン？！」

どうしてここに？」

その声に外にいる友人は、嬉しそうな表情を浮かべてハリーに手を振っているようだ。

ロンの隣には、フレッドとジョージもいるようでニッコリと微笑んでいる。

「ハリー！」

迎えに着たんだよ？

驚いた！？」

ロンは、満面の笑顔を浮かべてハリーに声をかけた。

ハリーは、目の前に現れたウイーズリー兄弟に驚きを隠せないまま見つめ返していた。

窓の外では、どこにでもありそうな真っ赤なバーンが、ロン達を乗せた状態で宙に浮かんでいるのだ。

その車は、何か特別な魔法が掛かっているのだろう。

「心配していたんだよハリー？」

手紙で約束していた通り我が家に招待したいっていう誘つたのに音沙汰なし……1ダース以上は、送りまくったもんでエロールは、いつも以上に疲労困憊さ。

しかも3日前の夜うちのパパが、家に帰ってくるなり君が、マグルの前で魔法を使つたとかでドジな魔女が、何の調査もナシに『公式警告状』を送つたって聞いてさ？」

ロンの言葉にハリーは、驚きを隠せない。

「魔法は、僕が使つたわけじゃない。」

だけど どうして 君のパパが、その事を知っているの？

友人の疑問に 赤毛の友人は、思い出したように 笑った。

「僕らのパパは、魔法省に勤めているだ。

だけど ハリー？

学校の外では、魔法を使っちゃいけないことは、君だって わかりきつて いる事じやないか

「自分のことは、棚に上げるつもり？

こんな車が、マグルの並ぶ家々の真ん前で 空を飛んでいる って いうのに」

ハリーは、浮かぶ車から視線を逸らさずに 神妙な顔だ。

その言葉に ロンは、”これは、違うよ”と 笑う。

「この車は、パパの持ち物。

ちょっと 借りただけなんだ。

別に 僕達が魔法を掛けたわけじゃない

結局は、咎められることに違ひない気がするのは、気のせいだろ？

「だけど 何の為に こんな危険をしてまで？」

眼鏡を掛けた少年の問いかけに ”ゴタゴタ 言つなよ”と 溜息をついた。

「勿論 君を僕らの家に連れて行くからに決まっているだろう？」
当たり前のような顔をしている ロンに ハリーは、息を呑んだ。
「どうやって？」

僕もそうだけど…… 魔法で僕を、連れ出せないだろ？

「わざわざ そっちの危険を冒すまでもない。

誰が、協力してくれている と 思つてる？」

赤毛の友人は、そう言つと 前の席にいる 同じ顔の兄達を顎で指し 二ヤツと 笑う。

「早くしないと 時間稼ぎも、持たないはずだ」

ジョージは、ゴソゴソと していたかと思えば ロープの端を、ハリーの方に投げ寄こした。

「それを、鉄格子に巻きつけるんだ。

連れ出すには、まず それが邪魔なんだから」

「伯父さん達が、気が付かれたら とんでもない事になっちゃうかもしだれないよ？」

今日は、従兄のダドリーが 友達の家に遊びにいっていて 遅くなるらしいけど……伯父さん達は、ちょっとした 音でも 敏感なんだ

ハリーは、素直にロープを鉄格子に巻きつけながら 不安そうだ。フレッドは、そんな弟の親友に “心配するな”と エンジンを吹かす。

「そつちは、何とか 時間稼ぎしてくれているはずさ。
ほら…… 危ないから 下がつて」

ハリーは、部屋の暗がりまで下がり 静かに事の展開を見つめる。エンジンは、だんだん 大きくなつて 鉄格子が、すっぽり 外れた。

運転している青年は、そのまま 車を空中で直進。

窓際まで駆け戻り 覗き込んでみると 鉄格子は、地上スレスレの状態で フラフラしており ロンドジョージが、息を切らせながら 車の中に引っ張り上げていっているようだ。

耳を側立ててみる限り ダーズリー夫婦は、この状態に気が付いていない。

フレッドは、鉄格子が無事に引き上げられたのを確認して 車をバツクさせ できる限り 窓際へと近づける。

「僕の荷物…… 全部 取り上げられちゃつて いるんだ。

ヘドウイッグも、ダドリーが餌を上げてくれているらしいんだけど 倉庫に閉じ込められちゃつて いるし。

前まで使っていた 階段下の物置の中に…… 鍵も掛かっているから 部屋から 出られな…… ガチャリ

ハリーの言葉が言い終える前に 部屋の扉が、ゆっくり 開いた。驚きを隠せず 固まっていると 廊下に立っていたのは、見知らぬ

少年だ。

自分と同じ年ぐらいの黒に近いこげ茶色の髪をした 少年が、片手にヘアピンを持って 立っている。

「今のうちだよ。

ダドーが、2人の気を逸らしてくれているから」 少年は、小声で言つた。

「マグルの小技か……。

習うだけ 時間の無駄だからって 馬鹿にする 魔法使いが多いけど……知つていて 捨は、なさそうだ

「だな?

トロいかもしないけど 今回のような状況で 魔法を使えないんじゃ 覚えていた方が、良さそだからな?」

フレッドとジョージは、感心したように 頷き合つてゐるようだ。「時間はあまり取れないから 簡単に自己紹介をさせてもらひうね?

僕は、フイリップ・シフォン。

ダドーに聞いていいかな?

僕の姉が魔女なんだ。

君達と同じ グリフィンドール生だよ」

ニッコリと微笑む少年に ハリーは、驚きを隠せない。

「ハリー…… 時間がない。

僕達が、トランクとヘドウイッグを運び出す。

君は、部屋の中から 必要なものを、片つ端からかき集めて ロンに渡してくれ「ジョージは、囁く。

ハリーは、双子とフイリップが踊り場の暗がりに消えていったのを確認して 部屋の中を飛び回るようにして 持ち物をかき集め 窓の向こうの車の中に待機している ロンに渡す。

しばらくして 赤毛の双子の知り合つたばかりの少年が、重いトランクとヘドウイッグの入つた 鳥籠を持ち上げ 階段を上がってきた。

下からは、バーノンの咳が聞こえ ダドリーが、声を張り上げて

何かを話しているようだ。

「ダードーも、そろそろ 話のネタが尽きたみたい。

「急いだ方がいいよ」 フィリップは、呟く。

一同は、やつと トランクを担ぎ上げて 車の中に投げ入れる。車は、大きく揺れたが 何とか トランクは、後部座席に納まってくれたらしい。

そして フレッドとジョージが、先に車に乗り込み ハリーが、ヘドウイッグの入った 鳥籠を車の中にいる 友人にバス。ハリーは、続くようにして 車に飛び込もうとした瞬間 背後から殺氣の籠つた 視線を感じた。

振り返つてみると 鍵の開いている 扉の前で バーノンが、怒れた 猛牛のように鼻を荒らげているようだ。

フィリップは、何とかして 阻止しようとしてくれたようだが 押し入られた衝撃で 背中を摩つた状態で 蹲つている。

ロンとフレッドとジョージが、眼鏡を掛けた少年の腕を掴んで 力の限り 引っ張つた。

その様子に バーノンが、”ペチュニアッ！”と 嘘き出したようだ。

「奴が逃げるぞ！－」

甥の足を掴もうとした手は、空を切り そのまま 男は、転がつてしまつ。

ハリーは、何とか 車の中に引っ張り込まれ ドアが閉まるや否や

”フレッド 今だ”と ロンが叫ぶ。

「アクセルを全開に踏むんだッ！」

車は、次の瞬間 月に向かって 急上昇していった。

後髪を引かれるように 振り返つてみると プリペット通りの家並みの屋根が、だんだん 小さくなつていいようだ。

フィリップは、無事に自由を得た ハリーの乗り込んだ車が見えなくなるのを確認して 小さく息をついた。

「これで 僕に出来ることは、終わったかな？」

「後は、大人に任せるべきだもん」

友人の呴きに ダドリーは、何とも言えない様子で 悪態をついている 父を見つめているようだ。

「大丈夫だよ ダドー。」

君のお父さんは、暗示に影響されているだけ。

元々 ハリーが、魔法に近づくことに対する いい感情を持つていなかつたみたいだから……それに 目を付けられただけさ。

しばらくしたら 元通りになるはず

「やっぱり ハリーをホグワーツに行かせたくない奴の仕業なのかな？」

3日前に 屋敷しもべ妖精が、ハリーを訪ねてきたのと関係があるのかもしないや」ダドリーは、神妙な表情を浮かべて 言う。

息子の発言を聞いて ペチュニアは、言葉が出ない。

ただ 夫を見つめているだけ。

「詳しくは、僕も知らないけど あつちじゅ……ハリーは、物凄い 有名人らしいんだよね？」

いい意味でも 悪い意味でも……。

妖精が、そこまでして ハリーに警告してきたことは、何か 意味があるんだと思うよ。

多分 ハリーをホグワーツに留まらせないうに 色々と妨害していくんだろうね？」

友人が、息をつきながら呴いたので ダドリーは、息を呑む。

「とにかく……何かが起こるのは、間違いないよ。

前回 連中は、失敗したわけなんだから 他の手を使ってくるはず

さ。

まあ…… 魔法使いでもない 僕らの出る幕じゃないんだけどね?

大丈夫だよ そんなに心配しなくてもね?

ホグワーツには、偉大なる 魔法使いがいるんだから

「ところで ダドリーから 屋敷しもべ妖精が、どうとか、……つて 聞いたんだけど？」

「一体 何があつて 閉じ込められることになつちゃつたわけ？」 口
ンは、待ちきれない様子で ハリーに問いかけた。

赤毛の友人の質問に 少年は、3日前の出来事を 話し出したよう
だ。

突然 訪れた屋敷しもべ妖精と警告…… ケーキまみれ騒動……
バーノンの異常な様子……。

話し終わると 3人は、ショックで 黙りこんでしまう。

「そりや…… 臭すぎる。

怪しそうるじやないか そんなの」

フレッドが、まず 口を開いた。
同じ顔をした 兄の言葉に ジョージも、”その通りだ”と 頷い
ているようだ。

「話が、極端すぎるじゃないか。

そのドビーは、結局 誰が、そんな罠を仕掛けているのか 教えて
くれなかつたんだろう？」

ハリーは、年上の双子の言葉に ”多分……” と あの妖精の様
子を思い出す。

「教えられなかつたんだと思うけど？」

ドビーは、何か話しそうになつたりする度に 自分で お仕置きし
ないと気が済まないようだつたんだ。

僕のところに来たことでも 家に帰つたら…… レンジで 耳を挟
まないといけないらしかつたし」

眼鏡を掛けた少年の言葉に、赤毛の双子は、顔を見合わせる。

「……まさか、フレッドとジョージは、ドビーが、僕に嘘をついたって言いたいのか？」

ハリーの問いかけに、双子は、困ったように、肩をすくめた。

「何て、説明したらいいんだろうな？」

『屋敷しもべ妖精』っていうのは、それなりに魔力を持っている。

勿論、俺達の持つのとは、違う力だ。

だけど、普通は、仕えている主人の許しがなければ、使えない」「だから、ドビーは、君がホグワーツに戻つて来れなくするために、送り込まれてきたのかも知れないんだよ。」

きっと誰かの悪い冗談さ。

学校にいる奴の中で、君に恨みを持つている奴、思いつかない？」

「いる」

ハリーとロンの声が、綺麗にそろつたようだ。

「ドラコ・マルフォイだ。」

あいつは、僕のことを、目の敵にしている

「マルフォイは、最初の組み分けの儀式の前、ハリーに友達になつてやる、って他の新入生の前で、進み出てきたんだけどさ？」「僕やハグリットのことを侮辱したから、って、ハリーは、それを退けた。」

あいつが、他のスリザリン生と一緒に、嫌がらせをしてきたのは、その後からさ？」

弟の説明に、フレッドは、「なるほどね？」と頷いている。

いつの間にか、車の運転は、ジョージと代わつたらしい。

「ドラコ・マルフォイは、ルシウス・マルフォイの息子だ。パパが、そいつのことを話しているのを聞いたことがある。ルシウス・マルフォイは、例のあの人人の信望者だつて。

だけど、『あの人』が消えたとなると……」

「そのルシウス・マルフォイは、世間に顔を晒すなり、全て本心じゃなかつた、って宣言したらしい。勿論、嘘八百だ。」

金を役人に支払つて 証拠も、握り潰させたに決まつてゐる。

うちのパパは、奴が『例のあの人』の腹心の部下だったと考えているんだ。

現に 奴の奥さんの姉は、ある夫婦を拷問した罪で アズカバンに入つてゐるんだから

「だけどさ？」

僕 マルフォイ家に屋敷しもべ妖精がいるかなんて 知らないんだけど？」

ハリーの疑問に フレッドは、“いるだろ？？”と どこか自嘲氣味。

「マルフォイ家は、古くから魔法界で続いている旧家の末裔だ。しかも 金持ちときた」

ジョージも“本当に”と 苦笑氣味。

「うちのママなんか アイロンかけする『しもべ妖精』がいたらいのに つて しそつちゅう愚痴つてるぞ。

だけど、うちにゐといえば 喧しい屋根裏お化けや庭に巣食つている小人だけだ。

屋敷しもべ妖精つていうのは、大きな館とか城とかにいるもんなんだよ。

俺達の家には、絶対に来ないって」

その話を聞きながら ハリーは、色々な考えが頭の中で 巡つっていた。

「とにかく 迎えに来てよかつたよ。

だつて……いくら手紙を出しても 返事をくれなかつただろう？
まあ 最初は、エロールのせいかとも思つていたんだけど……」

ふと ハリーは、“エロールつて？”と 首を傾げているようだ。
話を聞いてみると それは、ウイーズリー家の父親が子供の頃から一緒にいる梟の古株らしい。

「奴は、もう化石さ。

ちょっとした配達でも へばっちらうんだから。

だから………パーシーのヘルメス っていう 鼻を借りようとした
んだけどさ？」

溜息をつく友人の様子に 少年は、グリフィンドールの監督生のこと
を思い出しているのだろう。

たとえ 兄弟だらうが 鼻にしない 優秀なロン達の兄。
何でも その鼻は、監督生になつたお祝いに パーシーが両親から
買つてもらつた使い魔だとか。

スキヤバーズは、その結果 ロンへと下げられたらしい。

「まあ パーシーは、貸してくれやしなかつたと思うぞ？

だつて 自分に必要だつたらしげから」 フレッドは、前の座席から
水筒をハリーに手渡しながら 呟く。

その中身は、かぼちゃジュースだが ほとんど残つていない。

何でも ダーズリー家に向かつてている途中 上空でぶちまけてしま
つたとか。

「パーシーの奴さ？

最近 おかしくないか？

手紙を山程どこかに出しているみたいだし………部屋に半端じゃ な
いくらい 閉じこもつていているよつなんだから。

部屋を出できたと思つたら この休暇中 どこかへと出かけていく
「もしかして ホグワーツを卒業する前に 色々な著名な人達に手
紙を送つて 卒業後は、偉大なことをするつもりなんじゃねえの？」
フレッドとジョージの会話を聞きながら 少年2人は、顔を見合わ
せてしまつ。

「ところで 君達のパパは、この車が 空を走つてゐることを知つ
ているの？」

ハリーは、その質問をしなくとも 答えはわかっていた。

「パパは、今夜 仕事でね？

僕達が車を飛ばせたことを、ママに気付かれないうちに車庫に戻す
算段になつてゐる

ロンの説明に 少年は、呆氣。

本当に、そんな上手く計画が進むのだろうか？

「君達のパパは、魔法省で働いているんだっけ？…？」
「どういふ仕事をしているわけ？」

ハリーの質問に 赤毛の友人は“一番つまんないとこ”と 面白くなさそうな様子だ。

「『マグル製品不正使用取締り局』だよ。
マグルが作った物に 魔法を掛けることに関係することさ。
つまり それがマグルの店や家庭に戻された時の問題なんだけどね
？」

「去年なんか ある魔女のおばあさんが死んでた？
その家族が、遺品わけと称して 家にあつた品々を、古道具に売つたのが騒動の始まりさ。

しかも その店は、魔法使いやマグルも出入りする骨董店だつたらしくて どこぞのマグルのおばさんが、その魔法の掛かった品の1つの紅茶セツトを買つたらしい。

聞いた話じや お茶のポットが大暴れして熱湯をそこらじゅうに噴出したり 砂糖つまみの道具で鼻をつままれて、病院に担ぎ込まれた人もいたんだと。

その結果 パパは、何週間も残業続きだよ。

パパの他にいる同僚なんて……パーキンスっていう 年寄りだけなんだから…… 事実上 パパは、一人で もみ消し作業に追われていたんだ。

まあ ビルの友達が、マグルの色々な事情を知らせてくれたお陰で 被害は、広まらずに済んだらしいんだけどね？

知ってくれた友達の中の1人も、犠牲者だったらしいんだけど。何でも その家の子供が、3年生から使う 怪物の本に追い掛け回されたらしい」

ふと ハリーは、それを聞きながら とある疑問が浮かび上がつてくる。

「だけど これは、いいの？」

この車は、君達のパパが魔法を掛けたものなんでしょう？

眼鏡を掛けた少年の言葉に フレッドは、“ そうさ～ ”と 声を上げて笑う。

「 うちの親父ときたら マグルのことなら…………なんでも 興味津々なわけ。

お陰で 家の納屋には、マグルの物がいっぱい 詰め込まれている。パパのホグワーツ来の友達の話じゃ そういうのをバラバラに分解して 魔法を掛けた後にそれを組み立てるのが大好きらしい。

もしも 親父が自分の家を抜き打ち調査してみる？

たちまち 自分を逮捕しなくちゃいけないだろうな？

「 もしも そうなれば お袋は、気が狂わんばかりに泣き叫ぶぞ？

だから 言つたでしょうッ！ってね？」

ジョージが“大通りが見えてきた”と フロントガラスを覗きながら 皆に声を掛けた。

「10分ほどで 着く。

良かつたな？」

もう 夜も明けてきたみたいだし。

何とか お袋を『まかせる言い訳が、浮かび上がつてくるかもしねい』

東の地平線が、ほんのりと桃色に染まっており 夜が明けてきたらしい。

フレッドが、高度を下げ ハリーの田には、畠や木立の茂みが黒っぽいパツチワークのように見えてきたようだ。

話によれば ウィーズリー家は、『オッタリー・セント・キャツチポール』 という から少し外れた場所に位置しているらしい。

空飛ぶ車は、徐々に高度を下げ 木々の間から 真っ赤な曙光が差し込み始めている。

運転している青年の“着地成功”という 言葉と共に 車は、軽く地面を打つて 一同は、無事に着陸した。

着地した場所は、小さな庭のボロボロな車庫の脇だ。

少年は、その時初めて ホグワーツでの初めての友人の家を眺める。そこは、かつて 大きな石造りの豚小屋だったのかもしれない。あっちこっちに 部屋を無理にくつづけている 数階建ての家。クネクネと 天に向かって曲がつており おそらく 魔法で何とか 支えている状態なのだろう。

赤い屋根には、煙突が4・5本 ちょっと 載つかっている状態。

入口近くには、看板が少し傾いて立っていた。

隠れ穴

と書いてあるようだ。

玄関の周りには、ゴム長がゴタ混ぜに転がつており 思いつきりさび付いた 大鍋が置いてある。

丸々と 太った茶色い鶏が数羽程 庭で 餌をついばんでいるらしい。

「ハリー……別に たいしたことないだろ?」ロンは、どこか恥ずかしそうに肩をすくめながら 呟いた。

けれど 眼鏡をかけた少年は“すつごいよッ!”と 目を輝かしているようだ。

プリペット通りに比べると 幸せな気分が、込み上げてくるような感覚なのだから。

「僕…………こんなにいいところ、初めて来たッ!」

ハリーの発言に ウィーズリーの3人は、驚きを隠せない様子で顔を見合わせてしまう。

「とにかく 直ぐに 静かに2階に行くんだぞ?

それで お袋が、朝食の時間だと呼ぶまで 静かに待つ。で……ロン?

お前は、下へ飛び跳ねながら 降りていって 言つんだ。

『ママ 夜の間に誰が来たと思う?』ってな?

そうすりや お袋は、ハリーを見て 大喜び。

俺達が車を飛ばしたことなんか あやふやになつて……誰も知らなくて済む』フレッドは、真剣な表情を浮かべて 言つ。

その言葉に ロンは、神妙な表情を浮かべて 頷いているようだ。ハリーは、そんな兄弟の会話に 訳が分らず、首を傾げてしまつていた。

そんな少年の様子に ロンは“大丈夫だよ?”と ニックリと微笑んでいる。

「ハリー いらっしゃる。

僕の寝室は……」

次の瞬間 赤毛の友人の顔は、一気に 蒼ざめた。

兄弟の目線は、一箇所に 釘付けになってしまっているようだ。視線を向けてみると 赤い髪をした 女性・モリー・ウィーズリーが、庭の向こうから 鶏を蹴散らせながら 猛然と突き進んでくる。小柄な丸っこい 優しそうな顔なのに 銳い牙を剥いた虎を連想させてしまうのは失礼だろうか？

ウィーズリー夫人は、44人の前で止まり 両手を腰に当てて バツの悪そうな顔をしている 1人1人を睨んだ。

花柄のエプロンのポケットからは、魔法の杖らしき物が見えている。母の“それで？”という言葉に ウィーズリーの子供達は、なるだけ 朗らかに見せるように 朝の挨拶をした。

「貴方達？」

母さんが、どんなに 心配したのか わかつているの？ その低い声は、淵みが効いているようだ。

3人は、夫人よりも背が高いように 怒りを露にしている母親の前では、小さく縮こまってしまっている。

「だって 仕方がないじゃないか！」

ハリーってば 閉じ込められていたんだよ？

しかも 杖もふくろうも取り上げられていて、連絡も出来ないでいてさ？

ダドリーが、協力してくれて ハリーを連れ出すことも、成功したんだから」 ロンは、悲しそうな表情を浮かべて 呟いた。

「そうだよ！」

おまけに 窓に、鉄格子まで つけられていたんだぜ？普通にやつていたら ハリーは、ホグワーツに 来られなかつたかもしれないんだから

フレッドも、弟の言葉に 続いていく。

「それに 間違いなく 魔法使いが、何かを企んでいるんだ。

屋敷しもべ妖精が、ハリーの伯父さんに魔法を掛け今までして 僕達と連絡を取れなくしていたんだから」 ジョージは、神妙な表情

息子の言葉に モリーは、訝しげな表情を浮かべて “それとこれは、別です！”と叫んだ。

「貴方達が使ったあの車は、お父さんが 魔法省に無断で 魔法を掛けたものなんですよ？！」

それが 罪に問われるようなことになつてしまつたら…………どうするつもりだつたんです？！」

そうなつてしまつたら お父さんは、魔法省でのお仕事を失うことになつっていたかもしれないんですよ？！」

ウイーズリーの母の言葉に 息子達は、言葉が見つからず 戸惑いながら 顔を見合わせていた。

「夜中に、ベッドを覗いてみれば 中は、空になつてゐるし……メモもない！

車は、消えていた！

何事 !と思つたでしようが。

もしかして 事故に巻き込まれてしまつたんじゃないのか って心配で……堪らなかつたですからね？！」 モリーは、顔を真つ赤にさせて 叫んでいる。

母の言葉に ロンと双子は、言葉が見つからないよつて 顔を見合わせてしまつっていた。

「こんな事 ビルやチャーリー…………パーシーだつて 一度も なかつたわ？！」

お父さんが、仕事から帰つてきたら 覚悟なさい？」 モリーは、難しい表情を浮かべて 言い放つ。

母のその言葉に 3兄弟は、困惑を隠せない様子で 顔を見合わせてしまつっていた。

ハリーは、そんな友人達の様子に戸惑いを隠せない風に、居心地の悪い 心境に……。

そんな少年の様子に気が付いたのか モリーは、ニッコリと微笑んだ。

息子の言葉に モリーは、訝しげな表情を浮かべて “それとこれ

を浮かべて 言つ。

「貴方達が使つたあの車は、お父さんが 魔法省に無断で 魔法

を掛けたものなんですよ？！」

それが 罪に問われるようなことになつてしまつたら…………どうするつもりだつたんです？！」

そうなつてしまつたら お父さんは、魔法省でのお仕事を失うことになつっていたかもしれないんですよ？！」

ウイーズリーの母の言葉に 息子達は、言葉が見つからず 戸惑いながら 顔を見合わせていた。

「夜中に、ベッドを覗いてみれば 中は、空になつてゐるし……メモもない！

車は、消えていた！

何事 !と思つたでしようが。

もしかして 事故に巻き込まれてしまつたんじゃないのか って心配で……堪らなかつたですからね？！」 モリーは、顔を真つ赤にさせて 叫んでいる。

母の言葉に ロンと双子は、言葉が見つからないよつて 顔を見合わせてしまつっていた。

「こんな事 ビルやチャーリー…………パーシーだつて 一度も なかつたわ？！」

お父さんが、仕事から帰つてきたら 覚悟なさい？」 モリーは、難

しい表情を浮かべて 言い放つ。

母のその言葉に 3兄弟は、困惑を隠せない様子で 顔を見合わせてしまつっていた。

ハリーは、そんな友人達の様子に戸惑いを隠せない風に、居心地の悪い 心境に……。

そんな少年の様子に気が付いたのか モリーは、ニッコリと微笑んだ。

息子の言葉に モリーは、訝しげな表情を浮かべて “それとこれ

を浮かべて 言つ。

「貴方達が使つたあの車は、お父さんが 魔法省に無断で 魔法

を掛けたものなんですよ？！」

それが 罪に問われるようなことになつてしまつたら…………どうするつもりだつたんです？！」

そうなつてしまつたら お父さんは、魔法省でのお仕事を失うことになつっていたかもしれないんですよ？！」

ウイーズリーの母の言葉に 息子達は、言葉が見つからず 戸惑いながら 顔を見合わせていた。

「夜中に、ベッドを覗いてみれば 中は、空になつてゐるし……メモもない！

車は、消えていた！

何事 !と思つたでしようが。

もしかして 事故に巻き込まれてしまつたんじゃないのか って心配で……堪らなかつたですからね？！」 モリーは、顔を真つ赤にさせて 叫んでいる。

母の言葉に ロンと双子は、言葉が見つからないよつて 顔を見合わせてしまつっていた。

「こんな事 ビルやチャーリー…………パーシーだつて 一度も なかつたわ？！」

お父さんが、仕事から帰つてきたら 覚悟なさい？」 モリーは、難

しい表情を浮かべて 言い放つ。

母のその言葉に 3兄弟は、困惑を隠せない様子で 顔を見合わせてしまつっていた。

ハリーは、そんな友人達の様子に戸惑いを隠せない風に、居心地の悪い 心境に……。

そんな少年の様子に気が付いたのか モリーは、ニッコリと微笑んだ。

「ハリー？　

貴方は、何も 気にしなくていいのよ。　

ほら 疲れたでしょ？　

かぼちゃジュース 飲む？　

それとも 朝食にするかしら？」モリーは、先ほどとは違つて 優しい口調で、話しかける。

先程までの鬼の形相の変わりぶりに 一同は、呆気に取られてしまう。

「ママってば ハリーには、優しいんだ。

僕らには、厳しいことを言つぐせに「ロンは、どこか 訝しげな表情を浮かべて 呟いた。フレッドとジョージも、苦笑しながら 顔を見合わせてしまっているようだ。

「仕方ないって。

ママは、昔から ジニーと一緒に、ハリーの事ばかり 色々と話していたんだからさ？

セーターだって 随分 力を入れていたようだし？」

フレッドは、そう言いながら 小さく溜息をついてしまっている。「だよなー？」

去年、キングズクロス駅で会った時 ジニーを注意していただけど内心は、絶対 大騒ぎしていたんだろうよ？

ミーハーは、母娘 同じだから ジョージも、苦笑しながら 呟いた。

そんな3人の様子に ハリーは、困惑を隠せない。

「とにかく 家の中に 入りなさい？

まだ みんなは、眠っているけど そろそろ 起きてくるでしょうし。

昨日の夜から オリバーとオリビアが、遊びに来ているのよ」モリーは、そう言って 目を、家の中へと 招き入れていった。

「あら？」

「もつ 明け方だわ？」

少女は、苦笑しながら 小さく欠伸をしながら、大きく伸びをした。伸びをした時に キヤミソールから、肌が 露見してしまっている。そんな少女の様子に 青年は、どこか 息をついてしまっているようだ。

青年の様子に 少女は、不思議そうな表情を浮かべて 首を傾げてしまっている。

「年頃の女の子が、そんな仕草をするな だつてさ？
しかも 格好も、格好だし？」

我等が 監督生殿は、そう思つてゐるらしい。

相変わらず お堅い性格をしてゐるよ。

今年も、また 厳しいんだろうよ？」 もう1人の テーブルで、コ
ーヒーを飲んでいる 青年は、苦笑しながら 言つた。

その言葉に 少女は、どこか 訝しげな表情を浮かべてしまつてい
るようだ。

「一つ 言わせてもらひうただけど……私も、パースと同じ 監督
生なんだけど？」

今年だつて 任命されたんだから。

まるで 私は、違うようじやないの！

失礼しちゃうわッ！？」

少女の言葉に 2人の青年は、顔を見合させて 吹き出しつてしまつ
ていた。

「オリビアつてば 本当に 分りやすいよな？」

本当に 顔に、出やすいしさ？」

まあ …… その分Mりやすくて いいんだけど

眼鏡を掛けた赤毛の青年 パーシー・ウイーズリーは、大爆笑。

その言葉に オリビア・シフォンは、膨れつ面になつてしまつてい
るようだ。

オリビアの様子に オッドアイの瞳を持つ青年 オリバー・ウッ

ドも、パーシーと一緒に 大笑いしている。

そんな青年2人の様子に オリビアは、神妙な表情を浮かべて 溜息をつく。

「2人共 笑いすぎなんだけど?

まあ 私なんて……いつも 周りに、笑われてしまつてばかりなんだけど?

何だか 怒る氣にも、なれなくなつてきちゃつたわ?」

エメラルド色の髪をした少女の言葉に パーシーとウッドは、不思議そうな表情を浮かべて 顔を見合わせてしまつ。

「そういうえばや?

モリーおばさまの怒鳴るような声が、聞こえた氣がしたんだけど? 誰かが 抜け出しているだの、どうのとか つて オリビアは、思い出したように 呟いた。

少女の言葉に パーシーは、苦笑してしまつているよつだ。そんな友人の様子に オリバーとオリビアは、不思議そうな表情を浮かべて 顔を見合させた。

「何でも 我等が、弟君達が 夜中に、ベッドを抜け出してしまつたらしいんだよ。

まあ サつき、外の方から 母さんの声が聞こえていたから、帰つてきただらしこけど。

お前達が、行動を起こす前に やつてのけたみたいだ」振り返ると 赤毛のロン毛をボニー・テールにまとめた、男が立つている。

「ビルも、起きたんだ?

今日から お仕事? オリビアは、ニッコリと微笑んで 言つた。

少女の言葉に ウィーズリー家の長男のビル・ウィーズリーは、息をつきながら 頷いているようだ。

「本当に てんてこ舞さ?

最近 本当に 呪いが、深刻化しているらしい。

今朝 いつもより 早い時間に 出ることになつてしまつよ

ビルの言葉に 一回は、心配そうな表情を浮かべてしまつてゐる。

「それじゃあ もう出るんだ？着替えたみたいだしさ？」

パーシーは、真剣な表情を浮かべて 兄を見た。

その言葉に ビルは、苦笑しながら 弟の頭を、思い切り ぐちやぐちやに。

兄の行動に パーシーは、戸惑いを隠せないまま 訝しげな表情を浮かべてしまつてゐるようだ。

「あ、あ？パーシーの寝癖…………余計 酷くなつたね？」

オリバーとオリビアは、苦笑しながら 顔を見合わせてしまつ。

扉を開けてすぐに入ると そこは、台所だった。

どこか 小さくかなり狭苦しい空間だ。

しつかり と 使い込まれたらしい 木のテーブルと椅子が、奥の方に見えている。

ハリーは、去年 自分が魔法使いだと わかつたばかりだった為 魔法使いの家の中に入ったことがない。

入つてすぐに見えている壁には、時計があつた。

それは、針が1本しかないものの 数字の代わりに 『お茶の時間』『鶏に餌をやる時間』『遅刻よ』などと 書き込まれているようだ。

暖炉の上には、本が3段重ねに積まれている。
少し振り返つてみると 流しの脇に置かれている古ぼけたラジオから 放送が届く。

「おはようございます～ッ！

お先に、飲み物 頂いてま～す」

ふと その声に辺りを見回してみると テーブル席には、見知った顔と見知らぬ少女のがあった。

少女の言葉に モリーは、苦笑してしまっているようだ。

「あら いいのよ？

にしても……普通に 作つたの？

別に 息子を使つてくれたら 良かつたのに」

そんな母の様子と一緒にコーヒーを飲んでいる 息子と友人は、顔を見合せている。

「えつと この女人人は？」

ハリーは、エメラルドの長い髪の毛を下ろしている肌の露出された服装の少女に少し肩をすくめてしまつ。

そんな眼鏡を掛けた弟の友人の様子に 寝癖だらけの髪の毛のパシーは、“オリビアだよ”と 苦笑氣味。

「嘘だろ……牛乳瓶の厚底の奥には、こんな顔が眠つていたのかよッ！」

フレッドは、信じられない といふように 声を張り上げる。

その隣では、ジョージとロンも、呆気に取られてしまつていらしゃい。

「フリンントは、もしかして……オリビアの素顔に 一目惚れしたんだつたりしてな？」

確かに俺らが、入学した辺りから お熱だつた気がするけど

「だけど……眼鏡は、どうしちやつたわけ？」

いつもの 牛乳瓶の底のような眼鏡は……」

「不測の事態が起こつて……砕け散つたの。

だから この新しい眼鏡を試しに使つているのよ。

今のことには、良好だから……このままかもしれないわ？」

ウイーズリー夫人は、子供たちの様子に息をついてから フライパンに ソーセージなどを投げ入れ 朝食の準備に取り掛かっている

「オリビアの目……僕と同じ 翠なんだね？」

ちょっと 驚いた ハリーは、不思議な感覚に陥りながら 呟いた。

眼鏡を掛けた少年の言葉に ロンと双子も、ハツとしたように 顔を見合わせているようだ。

「同じで当たり前。

ハリー……ホグワーツにいる時は、私自身 詳しく話していいのか迷っていたんだけど……」

オリビアは、胸元につけている ブローチの中から 何かを取り出していく “コレを見て？”と 見せてくれる。

そこには、幼い頃のものなのだろう オリビアの姿と何度も見たこ

とのある 優しい江上を浮かべた 赤毛の女性が微笑んでいた。

「ここに映っている女人人は、私の母……ソニア。

貴方のお母さんと伯母さんの一番上の姉なの。

随分 年が離れていたそうよ

突然の告白を聞いて ハリーは、驚きを隠せない様子だ。

それは、知らなかつたらしい ロン達も同じこと。

「じゃあ……何？』

ハリーとオリビアつて……従姉弟だったの？

なら ハリーを引き取るのは、あのダーズリー家じゃなくても 良かつたつてことなんじゃない？』 ロンは、真剣な表情を浮かべて言う。

「出来れば そうしていたかもね？

だけど 母と父は、11年前に 死んでしまったから。

母方の親戚とは、折り合いが悪かつたみたいで その後は、孤児院で育つたから…… 貴方を引き取ることが出来なかつた。

魔法界の英雄さんを、マグルの孤児院に保護できるはずがないつて 魔法省幹部の大反対を受けたみたい。

結局は、貴方のお母さんの唯一の血縁者である ダーズリー家に預けられた つてわけ

どこか 遠くを見つめるように苦笑する年上の魔女に 一同は、言葉が見つからない。

「ところで ハリー？』

貴方 部屋に閉じ込められていたんですね？

弟から それを聞いて……昨日の夜から オリバー・ヤバースと作戦を考えていたところだったのよ？

魔法を使わず 且つ マグルの目に留まらないような 貴方の救出方法。

結局は、どこかの ド素人が、とんでもないやり方をしてしまつたけれど

その言葉に ロンとウイーブリーの双子は、視線を泳がせた。

だが ハリーは、違うことに ハッとしているようだ。

「弟…………つてさ？」

もしかして マグルの男の子？

僕の従兄のダドリーと友達になつたらしい子が、お姉さんが、グリフィンドール生だつて言つていたけど…………」

「フィル…………フィリップの事ね？」

そう…………あの子は、私の弟よ。

父は違うけど 母は、同じだから あの子も、貴方とイトコになるわ？

あの子には、ホグワーツの入学通知は届かなかつたけれど 何かと相談に乗れると思うわ？」

ダドリーと友達になつたのは、偶然が重なつたようなんだけどね？」
その言葉に ハリーは、安心させてくれるような少年の笑顔を思い出す。

「へえ…………だからこそ 救出作戦は、成功したわけだな？」

じゃなかつたら 無事 戻れなかつただそうし オリバーは、平然と 不吉なことを言い出した。

「本当に…………無茶なことをしたわね？」

モリーは、フライパンを持つて それをテーブルの上に並べてあるお皿の上に ソーセージを滑り込ませたようだ。

眼鏡を掛けた少年の前にあるお皿には、何本もソーセージが載せられていく。

「夫とも 心配していたのよ？」

ロンが、貴方からの手紙の返事が送られてこない と 言つものなのだから。

新しい教材の通知が来ても この状況が続くようだたり…………迎えに行く計画を立てていたというのに」

モリーは、訝しげな表情を浮かべて 息子達を見つめながら、溜息をつき 今度は、目玉焼きをお皿に移す。

「だけど…………フィリップは、大丈夫なのかな？」

ダドリーは、あまり叱られないだろうけど
助けしたことで……伯父さんと伯母さんに咎められていなければいいんだけど

不安そうに囁くハリーに オリビアは、”大丈夫よ”と 笑みを浮かべた。

「あの子は、不思議なことに どんなに怒り狂っている相手でも……宥めちゃうから。

それに 得意のお菓子料理で……和ませちゃつているんじゃない？」

「だといいんだけど……何かあれば お隣さんが、仲裁に入ってくれると思うんだ。

近所の目を、気にしている伯父さん達だけど お隣一家のことば、少しだけ 信頼しているみたいだから

「おば様……落ち着きましたか？」
女は、頃垂れてしまつてゐる女性に 暖かい飲み物を差し出した。
「ありがと。…………迷惑をかけてしまつて 「ごめんなさいね?
前回だけではなく 今回までも…………」
その言葉に 女は、ニシコリと微笑んだ。
「困つた時は、お互い様ですよ。
それに 今回の出来事は、誰のせいでもない…………不幸な偶然が、
重なつてしまつただけです」
「ダーリスの言つ通りですよ 奥さん?
『主人は、しばらくの間 ぼーっと してこるかもしぬせんけど
異常はありませんから』
白衣を着た 勝気な口調の女が、ゆうくつと近づいてくる。
「エシー…………ありがとうね?
専門分野つてわけじゃないのに 頼んじやつて
「別にいいのよ。

確かに あつちこは、知らせるわけにいかないものね?

事が明らかになつていない以上……信用されないでしようし。

関わつたのは、極 最近のことだけ 胡散臭がられるのが、関の山つてことぐらい…… 分かりきつているわ

「アントンとトロイも 同じ事を言つていたわ?

ステラのお兄さん当たりは、笑つてゐるだけだつたし ベネディクトは、十字を切る始末」ドーリスは、苦笑しながら 呟く。

「まあ…………こつちは、落ち着いたから これ以上 悪いことにはならないんぢやない?

どういう目的があつて こんなことになつたのかは、別にして「2人の女性の会話を聞きながら 少しずつ 落ち着いてきた人物は、天井を見上げた。

「結局 いつまで経つても…………私は、連絡が来るのを待つしかないのね?

あの時も…………そして 今でさえも」

その声は、どこか 悲しげだ。

「それにしても……不正魔法の車で國中の空半分も飛んでくるだなんて 誰かに見られてしまつていたら、どうするつもりだったのかしら？」

そう言つて溜息をつくと モリーは、当たり前のよう流しに向かつて杖を一振りすると その中では、勝手に皿洗いが始まった。流し台からは、カチャカチャと軽い音が聞こえてきているようだ。

「ママ……訂正しておくけど 曇り空だつたよ？」

フレッドの言葉に 夫人は、“おしゃべり禁止ッ！”と 一括。「だけどさ？

連中は、ハリーを餓死させていたかもしないんだぜ？
それに 伯父さんは、話を聞いた限りじゃ……間違いなく 操ら

れていたはずなんだから」

ジョージの言葉にも モリーは、黙るよう命じて ハリーのためにパンを切つて バターを塗り始めると 前よりも和らいだ表情になる。

あまりにも違いに 眼鏡をかけた少年は、戸惑いを隠せない。

オリバー やオリビアは、その七変化のような姿に見慣れているのか 気にすることもなく パーシーと何か話し込んでいた。

その会話は、よく聞こえないが 最近のパーシーの不思議な行動に 関係があるようだ。

ふと その時 みんなの気をそらすことが起つる。

ネグリジュ姿の小さな赤毛の女の子が“おはよお～”と 台所に入つてきたかと思うと “キヤツ”と 小さな悲鳴を上げて また走り去つてしまつた。

ロン達は、青い眼をしていたが 明るい薫色が、パツチリしていた女の子だ。

呆気に取られていると ロンが“妹のジニーだ”と囁く。

「夏休み中……ずっと 君のことばかり話していたよ その言葉に フレッドとジョージも “ そうだったな？” と 優しげに苦笑。

「 だけど おかしくないか？

あいつが、あんなにシャイでいるなんてさ？」

「まあ そうだな？

いつもだったら おしゃべりなのに。つつきり ハリーに質問攻めするもんだと思ってた」

けれど 双子は、母親と視線が合ひや否や すぐ 傾いて 後は、黙々と朝食を食べ始めた。

パーシー達3人は、どこかへ出かける約束になつていいのか すぐ出かけてしまったようだ。
ハリー達は、4つの皿が空になるまで 誰もしゃべらないまま、食事が進む。

「 何だか どつと疲れた気がする」

フレッドは、やつとのことでナイフとフォークを置いて 小さく欠伸をする。

「僕 ベットでぬつくり休みたい……」

ロンの咳きに モリーは、“ いけませんよ？” と 一言が。

「 夜中に起きていたのは、自分が悪いんです。庭に出て 庭小人を駆除しなさい？」

また 手に負えないくらいに 増えてしまっているんですから 母の言葉に ロン達は、” ” ” そんなあー” ” ” と 情けない顔。けれど 夫人に、ギロリと睨まれてしまい 肩をすくめてしまつ。

「ハリー？」

貴方は、上のロンの部屋でぬつくり休みなさい？

あのしょもない車を飛ばしてくれ って 貴方が頼んだわけじや

ないんですもの」

「でも、僕も、手伝います。

だつて、3人は、僕のために危険を承知で駆けつけてくれたんだし……、ウイーズリー家の家族に迷惑になることを考えたら、甘えるわけにいかないから」

バッチリと目の覚めているハリーの言葉に、モリーは、”まあ、何て優しいの？”と、大げさな様子。

「でも、庭小人の駆除って、とても、退屈な仕事なのよ？」

そうだわ？

ロックハートの本で、効率的に駆除する方法があつてね？」

ウイーズリー夫人は、そう言って、暖炉に積み上げられている分厚い本の山から、本を1つ引っ張り出した。

本の背表紙には、ギロデロイ・ロックハートのガイドブック／一般家庭の害虫

ギロデロイ・ロックハートのガイドブック／一般家庭の害虫と、デカデカと豪華な金色の文字で書名が見えているようだ。表紙には、波打つブロンドに輝くブルーな瞳のハンサムな魔法使い（ハリーは、コンラッドの方が美男子だと思ったが）の姿が。

「ママつてば、彼にお熱なんだよ。

あんな顔だけの魔法使いのことなら……何でも、信じちやうのさ」フレッドの囁きが聞こえたのか、モリーは、“馬鹿なことを言わないで”と、どこか顔を赤らめてしまっているらしい。

その後、ハリー達は、庭に出て、庭小人を駆除する作業に入る。ウイーズリー家の庭は、広く、ダーズリー家の中庭など、本当に小さい物だと実感した。

まあ、ペチュニア伯母さんは、気に入らないかも知れないけど。雑草は、生い茂り、芝生は、伸び放題になってしまっているのだから。

けれど、壁の周りには、曲がりくねった木で囲まれており、花壇という花壇には、これまで見たことのないような植物が溢れるばかり

に茂つており 大きな翠色の池は、蛙で一杯だ。

「僕……マグルの庭にあるような、飾り用の小人しか知らないんだけど どんな生き物なの？」

その庭小人つて。

小人、つて聞いたら ドワーフでしょう？

マグルの御伽噺とかでは、働き者で 友好的 つて イメージがあるんだけど」ハリーは、庭の様子にどこか目を輝かせながら 呟く。眼鏡を掛けた少年の質問に ロンは“ああ、マグルが庭小人だと思つている奴ね？”と 苦笑気味。

「前にマグルの世界で生活している知り合いが、面白がって持つて来たのを見せてもらつたことがあるよ。

何だか 太つたサンタクロースの小さな釣竿を持っているような感じじやなかつたつけ？」

ふと ドタバタと何かが暴れるような音が聞こえて 芍薬の茂みが震え、中からフレッドとジョージがニヤニヤしながら 立ち上がる。

「「これぞ 本当の庭小人さッ！」」

双子の言葉に、手にしている何かを見てみると ソレは“放せ 放しやがれッ！”と 小さな生き物がキーキーと喚いていた。

確かに ソレを見る限り サンタクロースとは、似ても似つかない感じだ。

小さくゴワゴワした感じで ジャガイモ そつくりの凸凹した大きな頭の禿頭。

堅い小さな足で 自分を掴んでいる フレッドとジョージを蹴飛ばそうと暴れるので 2人とも その攻撃を受けないように 長い腕を伸ばして捕まえているらしい。

何でも 油断している 刃刀のように鋭い歯で 相手の指を噛み切ろうとするとか。

確かに 先ほどから フレッドの指を噛み切るつともがいでいるのもいるし 新しくジョージに捕らわれた少し大きめの庭小人も、殺氣の籠つた目で 機会を窺っているかのよう。

「連中は、あまり賢くないんだ。

庭小人の駆除が始まると連中は、寄つてたかつて見物にやつて来る。

巣穴の中にいれば、安全だつていうのに 未だにそれが、理解できないのさ」

「連中は、いくら 駆除しても 戻つてくる。
きっと ここが気に入つて いるんだろうな?」

パパは、甘すぎるんだよ。

面白い奴らだと思っているみたいだから

「だけど その小人をどうするの?

確か 駆除する つて……」

どこかショックを受けてしまつて いるハリーに ウィーズリーの3人兄弟は、顔を見合わせて笑う。

「別にさ?

小人を傷つけるわけじゃない。

ただ、完全に目を回させて 巣穴に戻る道をわからなくさせちゃえ
ばいいだけなんだから

ロンは、そう言つて 新たに捕まえたお手本といわんばかりに
小人の踵から手を離すと ソレは、宙を飛んで 5・6? 先の垣根
の外側の草むらに落ちる。

フレッドとジョージは、随分 離れた切り株の辺りまで 楽々と投
げ捨てていたが。

ハリーは、最初 庭小人の待遇が、あまりに可哀想だと最初のうち
こそ思つて いたが たちまちに そうも思わなくなつた。
捕獲 第一号を垣根の向こうに 優しく ソッと 落としてやるつ
と思つていたのに 最初 忠告されて いた通り、弱氣だと感じ取ら
れてしまったのか 思い切り 剃刀のように鋭利な歯を、指に食い
込まれてしまったのだ。

少年は、懸命に振り払おうと散々でござり やつとのことで 1

5・6? ほど飛ばすことに成功。

「オリビアなんか 20? は、軽く飛ばしてたぞ？」

何でも お袋の肩身のネックレスの鎖を思い切り引きちぎられそうになつたんとさ。

今は、何かと危ないから ブローチにしたらしいけど

「ああ……確かに 初めてうちに遊びに来た時だつて？」

最初は、随分と怖がつていたようなのに 今じゃ 長年やり続けて

いる俺達よりもお手の物さ」

その後 ハリー達は、何とか 駆除が一段落したので 隠れ穴の中に入つた。

ちょうど デニからか戻つてきた パーシー達とも一緒だ。

「何だよ。

駆除が終わる時間を考えて 帰つてきたんじゃないだろうな??」
フレッドとジョージは、訝しげな表情を浮かべて 兄とその友人に声を掛ける。

赤毛の双子の言葉に 3人は、顔を見合わせてしまつ。

「おいおい……お前ら?

僕らは、別に遊んでいたわけじゃないんだぞ?」

パーシーは、訝しげな表情を浮かべて 弟達の髪の毛をワシワシと撫でた。

その結果 全員が、ハリーのつよい 跳ね毛になつてしまつているようだ。

眼鏡を掛けた赤毛の兄の報復に 3兄弟は、顔を見合させるしかない。

「後で、みんな 鏡の前でにらめっこになるわね?」 オリビアは、クスクスと楽しそうに ハリーとオリバーに囁く。

「だけど おばさんの機嫌は、直つたのかな?」

朝食の時は、お世辞にもいい雰囲気じやなかつたからね?

うちにはいるよりも 緊張しちゃつたよ」 オリバーは、どこか息をつきながら 言つ。

中からは、甲高い女性の声と落ち着きのある男性の声が聞こえてい

る。

「「「パパが帰ってきたーーー！」」」ロン達3人は、その声を確認して同時に叫ぶ。パーティも友達の前だからか落ち着いているようだが、内心は、嬉しいのかもしれない。

家中に入ると 男性・アーサー・ウェーヴリーは、台所の椅子に倒れるようにすわり 眼鏡をはずして、目を瞑っていた。細身で禿げていたが わざかに残っている髪の色は、ロン達と同じ赤毛だ。

ゆつたりとした長い緑色のローブは、埃っぽく 旅疲れに浸つているらしい。

「酷い1日だったよ」子供達が周りに座つたのに気が付いたのか無意識なのか ポットを弄りながら、咳く。

「9件も抜き打ち調査することになつたんだッ！
マンダンガス・フレッチャーなんか……私が後ろを向いた隙に呪いを掛けようとしたし」

ウェーヴリー氏は、お茶をゆつくりと一口飲むと 深く溜息をついた。

「パパ 何が面白いこと無かつた？」

フレッドは、急き込むように 質問。

ジョージも、どこか興味津々な様子だ。

「私が押収したのは、せいぜい 縮む鍵が数個と瞞み付くヤカンくらいだ。

本に追い回されている男の子がいるという情報は、ある意味正しかったが それは、店の店主が誤つて スクイブの男の子に怪物の本を売つてしまつただけのことだつたらしいしね？

私が駆けつけた時には、もう解決していたんだ」

アーサーは、そう言いながら 本当に疲れているのか、大きく欠伸をしている。

「まあ、かなりすごいものが一つあつたらしいが、それは、私の管轄外だつたんですね？」

モートレイク辺りが、引っ張り出されて、奇妙なイタチについて尋問を受けたようだがね？」

多分、あれは、実験的呪文委員会の管轄になるだろう」

「あら……ペニーのお父様が室長している部署ね？」

「今日、ペニーの家に行つてきましたよ？」

ちょっと、気になることがあつたりして、調べていたんですよ」オリビアは、どこか嬉しそうに咳く。

息子の友人の言葉に、ウイーズリー氏は、“そうか”と、どこか肩をすくめてしまう。

「だけどさ？」

鍵を縮めたりして、何になるわけ？」

ジョージは、不思議そうに咳いて、首を捻つた。

アーサーは、難しい顔をして、“マグルをからかうためだ”と、深く溜息だ。

「マグルにそういうた魔法の掛かつている鍵を売つて、いざ、その鍵を使う時には、縮んで見つからないようにしてしまふんだよ。勿論、犯人を擧げることは、至極、難しい。

マグルは、鍵が独りでに縮んだなんて、誰も認めないだとうからな？おそらく、鍵をなくしたと言い張るだろう。

魔法を鼻の先に突きつけられたつて、徹底的に無視してしまふんだよ。

まあ、中には、魔法を信じるマグルも入るが、彼等の世界では、そういう人々を頭がおかしいと決め付けてしまうんだからな？マグルの前に公になつてゐる悪戯的な魔法なんて、全く途方もない物が……」「たとえば車なんか？」

その声に振り返つてみると、一同は、思わず飛び上がつてしまつた。モリーが、長い火搔き棒を刀のように構えているのだ。

アーサーだけは、初めて、パッチリとパー・ブルの瞳を見開いて、奥

さんをバツの悪そうな様子で見つめている。

「モリー……………車とは、どういうことなんだい？」

夫の反応に ウィーズリー夫人は、“ええ アーサー？”と ランランな目でニッコリと笑った。

「あの車のことです。

ある魔法使いが息子の友人から中古でオンボロ車を安値で買い取つて 奥さんには、仕組みを調べるために分解すると言つておきながら 実は、呪文をかけて 飛べるようにした というお話もありますわ？」

それを聞いて アーサーは、目をパチクリ。

「あのだね？』

わかつてもらえると思つてゐるが それを行つた人は、法律の許す範囲で行つたものでな？

知つての通り 法律というのは、抜け穴があるのだよ。

だから その車をければ その車が、たとえ飛ぶ能力を持つていたとしても……「アーサー・ウィーズリー！」

ウイーズリー氏の言い訳の途中で 夫人が、大声で叫んだ。

「貴方は、その法律を作つた時に しつかりのその抜け穴を書き込んだのでしょうか？」

そんなモリーの様子に ハリーは、驚きを隠せない。

けれど 他のメンバーは、慣れた光景なのか 動じていない様子。

「貴方が、納屋一杯のマグルのガラクタに悪戯したいもんだから そうしたんでしょう？！」

知らないとでも思つていましたか？

貴方は、ホグワーツに通つていた頃から 変なガラクタに魔法をかけてばかりいたじゃないッ！

そのせいで、テッドやルーカスが巻き添えになつてばかりだつたじゃない！！

妻の発言に 夫は、言葉が見つからないらしい。

「申し上げますが ハリーが、今朝 到着しましたよ？

貴方が飛ばすつもりがないとおっしゃっていたあの車でね？」「

アーサーは、それを聞いて ポカンとしてしまつていてる。

ウィーズリー氏は、グルリと家中を見回して やつと 眼鏡をかけた少年に気が付いた。

そして それと同時に 飛び上がつてしまつているようだ。

「なんと……まあ ハリー・ポッター君かい？」

よく来てくれたッ！

ロンが、ホグワーツから戻つて いつも君の事を……」

アーサーは、何が疑問が頭をよぎったのか 言葉を切る。

「貴方の息子達が、昨夜 ハリーの家まで車を飛ばして……連れ
てきたんですッ！」

何か おっしゃりたいことは？」モリーは、まるで 夫の心境を読
んだかのように 怒鳴りつけた。

けれど まるで、その求められている答えとは違う物が頭の中に浮
かんでいるらしい ウィーズリー氏は、“上手く んだのか？”と
ウズウズしている。

でも 妻の目から火花が飛び散るのを確認して 口籠つてしまつ。
少年は、次の瞬間 モリーが、大きな食用蛙のように膨れ上がつた
のを見た。

「は 初めまして！えっと ハリー・ポッターですッ！」

ロンとは、同じグリフィンドールで 友達です。

今日は、急に 来てしまつて……すいませんでした。

3人は、僕のためを思つて車で駆けつけてくれただけなんです。

だから ロン達を叱らないで下さい」

ハリーの声は、裏返つてしまつてゐるようだ。

そんな少年の様子に 一同は、呆気に取られながら 顔を見合わせ
てしまつてゐる。

「何だか ハリーってば、恋人の家に来て 父親と鉢合わせた時み
たいね？」

ここでは、ロンが ハリーの恋人になるのかしらね？」オリビアは、

笑いを噛み締めながら 呟いた。

少女のその言葉に オリバーとパーシー や、双子も含めて 一同は、吹き出してしまっているようだ。

ハリーは、皆のそんな反応に 複雑そうな表情を浮かべて 肩をすくめてしまつ。

どうやら この一件で 先ほどの険悪な空気は、一気に 一掃されたらしい。

「こらこら オリビア？

ハリーが、困つてしまつているじゃないか」

アーサーは、そう言って 苦笑。

その言葉に 少女は、息をつきながら 肩をすくめた。

「で……大丈夫だつたかい？

何があつたのかは、知らないが ずっと 連絡が取れないままだつたのだから

アーサーは、心配そうな表情を浮かべて ハリーの顔を、覗きこんできているようだ。

その言葉に ハリーは、“大丈夫です”と 首を振つてゐる。

「心配かけて すいませんでした。

それに こんな風に 僕なんかのこと 思つてくれて」ハリーは、複雑そうな表情を浮かべて 呟いた。

ハリーのそんな様子に 一同は、戸惑いを隠せない様子で 顔を見合わせてしまつてゐるようだ。

「そりや 友達だし？

心配して 当たり前でしょ？」

特に ウィーズリー家の皆さんは、本当に 優しいのよ？

私だつて 初めてこの家に、来た時は 今のハリーのような、心境になつていたもの？」オリビアは、苦笑しながら 言つ。

その言葉に ハリー達は、不思議そうな表情を浮かべてしまつてゐるようだ。

「だな？」

僕も 泊まりに来た 夜中のうちに 双子達に、布団詰めにされた
りして 大変だった。

しかも 新学期早々 遅刻しかけたし。
駆け込み乗車で 何とか、間に合つたんだつたつけ?」 オリバーも、
苦笑しながら 言つた。

青年の言葉に 少女は、“乗り遅れたわよ”と 息をつきながら
小声で呟く。

「しかも 遅れたのは、私とオリバーだけ。
その時、新入生だつた ツインズを抱えて パーシーとチャーリー
は、間に合つたけどね?

あの時は、本当に 参つちやつたわ?

だって その日は、何十年かに一度の入り口の整備の日だつたから
……お互いに 顔を真つ青にさせちゃつて」 オリビアは、溜息を
つきながら 言う。

その言葉に オリバーは、苦笑してしまつているらしい。

「ああ……それで 開かない入り口の前で 途方に暮れたんだっ
け?

で ナイトバスで ホグワーツに向かう事になつたんだよね?
ちょうど キヤロンとキヤロルが、通りかかってくれて スタンと
連絡をつけてくれたんだ。

まあ 学校に着くなり マクゴナガル先生に、お小言をもらつたな?
前学期 注意はしたはずでしちゃうが つて。

ダンブルドア先生には、大爆笑されちゃつていたけど「オリバーは、
息をつきながら 呟いた。

ウイーズリーの面々は、そんな2人の会話に 顔を見合させて、肩
をすくめてしまつてゐるようだ。

ハリーは、そんな家族の様子に 微笑を浮かべながら、見つめてい
る。
「だから 置いてきぼりにした時の事は、ちゃんと 謝つただろう?
まだ 根に持つていたのか?

何年経つたと思つていいんだよ」パーシーは、呆れたよつに溜息をつき、呟いた。

その言葉にオリビアは、訝しげな表情を浮かべてしまつてゐるようだ。

「言つておくけどね～？」

私は、あの時 1時間も前に 駅に着いていたのよ？！

なのに……約束の時間になつても 2人は来ないし。

他のみんなは、どんどん ホームに、向かっていく様子を見つめてたんだから。

拳句の果てに あんな窮地きゅうじに 陥つて。

すごく 恥ずかしかつたんだからね？！

まさか 大荷物を入れた カーターを前に 立ち尽くすなんて。

何も知らない マグルの人達には、クスクス笑われたし。

駅員らしき人達には、不審人物扱いよ？」 少女は、神妙な表情を浮かべて 言う。

オリビアの言葉に ハリーとロンは、その様子を思い浮かべてしまふ。

そして 思わず 吹き出す。

双子も、そんな人の少年の様子に 笑いを噛み締めてしまつてゐる。皆の様子につられて オリバーとオリビアを除いた メンバーも、苦笑してしまつた。

そんな一同の様子に 2人は、顔を見合わせて 溜息をついてしまつてゐるようだ。

ハリーは、そんな風に笑いながら こんな素敵な家に遊びにこれで、幸せだと感じる。

隠れ穴での生活は、自分が当たり前だと感じてしまっていた
プリペット通りのものと全く違っていた。

型どおりの行動を嫌っていた ダーズリー夫妻と違つて ウィーズリー一家は、少し変てこで 度肝を抜かされることばかりなのだ。
隠れ穴に来た翌日の朝 初めて暖炉の上にある鏡で寝癖を直そうと
すると ハリーは、思わず飛び上がってしまう。

『だらしないぞ シャツをズボンの中に入れろよ』と 鏡が大声を
上げたのだから。

まあ 少年の驚きは、初めて それを目にした オリビアには、比
べられないほど 甲高い悲鳴を上げたらしいが……。
そのせいか 隠れ穴に潜んでいる生き物は、彼女が訪問すると ど
こかピリピリしてしまっているらしい。

ロンの部屋は、台所から抜け出し 狹い廊下を通りて、凸凹でジグ
ザクに上へと続く階段を上り ウィーズリー家の唯一の長女・ジニーの部屋（オリビアと相部屋）が、3番目の中腰場にあり そこから 2・3つ踊り場を通り過ぎ ペンキの剥げた扉の向こうにあつた。

ハリーは、最初のその部屋に入った時 切妻の斜め天井に 頭をぶ
つけそうになってしまったそうだ。

まあ その驚きを吹き飛ばすように、部屋の中にあるオレンジ一色
の部屋に圧倒されてしまったが。

ロンの粗末な壁紙の隅から隅には、『蠟燭のチャドリー・キャノンズ』という クディッチチームのポスターが貼つてある。

勿論 そのポスターは、自分達に向かって 手を振つており 鮮や

かなオレンジ色のユニフォームを着た 男女7人の魔法使い達は、
 笋を元気に手を振つてくれていた。

「僕 ここに、来て一週間経つて いるけど 」この家の方が素晴ら
 しいところだとと思うよ？」

「だって……こんなに 楽しいことばかりがあるんだもん」ある上
 天気の朝 ハリーは、目を輝かせながら 言つた。

「 そうか？」

屋根裏お化けは、家の中が静かだと 決まって 嘘き出すんだぞ?
 しかも パイプを落としてくるしさ?

フレッドとジョージは、変な実験をして 小さな爆発音とかが聞こ
 えてくるし。

それに パパの様子が恥ずかしいよ。

君に聞いて いるマグルの道具の話題で 大興奮しているんだから「
 そうは言つているものの ロンは、頬を真つ赤にさせてしまつてい
 るようだ。

「 だけどさ?

僕が、一番不思議なのって やっぱり ロンのパパとママが、すぐ
 く 僕によくしてくれることなんだ。

普通の友達になら オリビアやオリバーみたいに 優しい感じだけ
 ど 何だか 僕 ロン達に申し訳なくなつちゃうくらいなんだ」「
 眼鏡を掛けた友人の言葉に ウィーズリーの少年は、首を捻る。

「うーん?

最初のうちは、オリビアにも 今のハリーみたいにお節介とかして
 いたらしいよ?

この前 初めて オリビアが、孤児だつて聞いて……少し 納得
 できただけどさ?

しかも ハリーとは、従姉弟ときたんだから……驚きの連続さ
 「確かにネ?

僕も 驚いちやつたよ」ハリーは、苦笑しながら 頷く。

「 聞いた話じや……オリバーの方も、何だか 複雑な家庭環境ら

しいんだよ？

お父さんは、赤ちゃんの時に死んじゃつたらしくて……今は、父方のお祖父さんとお祖母さんの家で生活しているらしいんだ」

その言葉に少年は“お母さんは？”と首を傾げた。

普通 父親が死んだだけなのなら 母親が、自分の子供を育てるのが当たり前ののだ。

その質問に ロンは、どこか肩をすくめてしまつ。

「本人に直接聞いたんじゃなくて パパ達が話しているのを聞いたんだけどさ？」

何か 元々 その結婚に反対されていたらしくて オリバーのお母さんは、旦那さんが亡くなつた後 オリバーの妹と一緒に追い出されちゃつたんだって。

オリバーは、跡取りだから つて、置いてきぼり。

何か お祖母さんの方が、オリバーのお母さんのこと嫌つているらしい。

1人息子を、奪つたんだから 同じように奪つてやるつて。

オリバーは、父親似で その妹は、母親似だつたらしい

「オリバーの家のことも、全然 知らなかつた」

呆気に取られているハリーに ロンは“だよなー？”と 息をつく。

「まあ オリバーは、今のハリーの頃こそ 窮屈で、家の中にいるのが嫌で堪らなかつたらしいけど ホグワーツに入つてからは、パーシー達と一緒にいることで その鬱憤を晴らしているらしい。

勿論 クディッチの試合でも練習でも、そんな感じなんだろうけどさ？」

今年も 扱かれるんじゃないかな？」

「誰に？？」

その声に ハリーとロンは、驚きを隠せず 飛び上がつてしまつた。振り返つてみると オリバーとオリビアが、不思議そうな顔をしてしまつているようだ。

「食事の時間だつてさ。

おばさんが、降りきなさいって声を張り上げているぞ？」

「そうそう 丁度 フレッドとジョージの実験の爆発音が響いていたから 気が付いていなかつたかもしれないけど」

2人の言葉に ハリーとロンは、顔を見合させて キッチンへと向かう。

オリバーとオリビアは、途中で パーシーを起こすために奇襲を掛けに行つてしまつたらしい。

台所では、ウイーズリー夫婦とジニーが、すでにテーブルについている。

けれど 赤毛の少女は、眼鏡を掛けた少年の姿を確認した途端 オートミール用の深皿を、うつかりひっくり返して床に落としてしまい カラカラと 大きな音が響き渡つた。

彼女は、ハリーが同じ部屋に入つてくるたびに 物をひっくり返すことを繰り返してしまつてゐるのだ。

兄は、そんな妹の様子に 不思議で堪らないらしい。

ジニーは、テーブルの下に潜つてお皿を手に顔を上げると 顔の色が、真つ赤な夕日のようになつてしまつてゐる。

こういう時は、何も気付かなかつたフリをして テーブルにつき食事を始めるに限る。

「そうだ……学校からの手紙が届いていたよ」

アーサーは、ニッコリと微笑んで 息子とその友人に、全く同じ封筒を手渡した。

「さすが ダンブルドアは。

彼は、氣味がここに滯在していることを存知なのだからね？」

ウイーズリー氏は、苦笑して “お前達にもだ”と パジャマ姿のまだ目が覚めていないおぼつかない足取りのフレッドとジョージに声を掛けたようだ。

手紙には、去年ハグリットから受け取つた物と同じく 9月1日にキングズ・クロス駅の9と4分の3番線からホグワーツ特急に乗るようとに書いてある。

2年生は次の本を準備すること

基本呪文集（2学年用）

- ミランダ・ゴッズホーク著
泣き妖怪バンジーとナウな休日
- ギロデロイ・ロックハート著
グールお化けとクールな散策
- ギロデロイ・ロックハート著
鬼婆とオツな休暇
- ギロデロイ・ロックハート著
トロールととろい旅
- ギロデロイ・ロックハート著
ヴァンパイアとバツチリ船旅
- ギロデロイ・ロックハート著
狼男と大いなる山歩き
- ギロデロイ・ロックハート著
雪男とゆつくり一年
- ギロデロイ・ロックハート著

「おいおい お前らも、ロックハートのオンパレードじゃないかッ！」

フレッドは、自分のリストを読み終えたのか ハリーと論のリストを覗き込んできた。

「新しい『闇の魔術に対する防衛術』の先生は、ロックハートのファンの魔女だ！！」

そう断言するも 赤毛の青年は、母親と目が合つてしまい 慌てて

ママレードを手にしているトーストに塗りたくつているようだ。
同じ顔をしている兄の様子と裏腹に ジョージは、どこか両親に視線を送る。

「だけど この一式は、安くないぞ？」

ロックハートは、今やお茶の間じや人気の魔法使いだ。その上 本を1冊買うにも、相当な金額になっちゃうんだから

息子の不安そうな様子に モリーは“なんとかなるわ？”と どこか心配そうな顔。

「多分 ジニーの分は、みんなが使っていた物のお古だし。
制服の方も オリビアが、あまり使っていなかつた セーターとか
を持つてくれて 大助かりなんだもの」

ウイーズリー夫人の呟きを聞いて ハリーは“ああ、そうか”と
ジニーに視線を向けた。

「確か 僕らと1つ違いなんだっけ？」

同じ寮になれるといいね？」

眼鏡を掛けた兄の友人の質問に ジニーは、真っ赤中身の根元のところまで顔を真っ赤にさせて 何とか頷いているようだ。
けれど、バターの入つたお皿に肘まで突っ込んでしまつたようだが
ちょうど パーシーが階段から転げ落ちてしまつたこととそれを大爆笑のオリバーとオリビアのお陰で それを見たのは、ハリーだけだつたらしい。

「皆さん おはよう。

いい天氣ですね？」

何事も無かつたように爽やかな挨拶をするグリフィンドール寮の監督生の様子には、弟妹も含め ハリーも吹き出すしかない。

「つたく……あれくらいで 階段から落ちるかしら？」

オリビアは、不思議そうな表情を浮かべて 空いている椅子に腰を掛ける。

「いや 誰だつて、驚くと思うけど？」

まさか、人が着替えている時に いきなり 部屋を押し入られるだ

なんてや？

パジャマを着替えるだけなら末だしも、監督生バッジまでつけるの
つて おかしいけど」

友人2人の発言に 眼鏡を掛けた赤毛の青年は、訝しげな表情を浮
かべ たつた1つだけ空いている 椅子に座つたが その途端 弹
けるように飛び上がつた。

パーシーは、そして尻の下から ボロボロ下の抜けた毛ばたきのよ
うに見える何かを引っ張り出した。

その毛ばたきは、ちやんと息をしているようだ。

「Hロール！」

ロンは、πレπレふくわうを兄から受け取り 翼の下から手紙を取
り出す。

「やつと来た！！

エロールじいさん…………やつと ハーマイオニーからの返事を持つ
てきたよ」

アーサーは、息子から年寄りな鼻を受け取つて 壁際にあるフカフ
カな古いタオルのある止まり木に寝させる。

赤毛の少年は、嬉しそうに 封筒を破つて、手紙を読み始めた。

ロン、ハリー？

お元気ですか。全てが何とか上手くいって良かつたと思つていま
す。手紙には、詳しく書いてありませんでしたが、ロンがハリーを
救い出した時 違法な手段を使つていなかつたでしょうか？ だつて
そんなことをしてしまえば、ハリーも困つた立場になつてしまつ
のですから。

また お手紙下さい。

だけど 別な鼻を使った方がいいかもしません。あの子にもう一
回でも配達させたら、貴方の鼻は、もうおしまいになつてしまつ
かもしれないんだもの。

私は、今日も勉強を忙しくしています。

後 水曜日にはモリー・アルと一緒に、新しい教科書を買いたロンドンへ向かうことになっています。

ダイアゴン横丁でお会いできませんか？

お返事を待っています。では、また

ハーマイオニー

「ハーマイオニーってば、マジかよ？！」

休み中 勉強しているだなんてさ？」

ロンは、手紙を読み終えると 恐怖で顔が引き攣つてしまっているようだ。

「ちゅうどいいわ？

私達も出かけて 彼方達の分を揃えましょう」 モリーは、テーブルを片付けながら 言いつ。

その言葉に 皆は、顔を見合させる。

その日 ハリーとロンとフレッドとジョージは、丘の上にあるウイーズリー家の小さな牧場に出かけた。この草むらは、周りを木立に囲まれ 下の村からは、見えないようになっているそうだ。

そういう利点から 一同は、あまり高く飛ばないということを条件に クディッチで遊ぶことに。

本物ボールなどは、万が一の場合 ボールが逃げ出して、村の方に飛んでしまったら 説明のつけようがないし 元より 本物のボールは、ウイーズリー家がないのだが……。

一同は、ボールの代わりに 果樹園に生っていた林檎でキャッチボールをする。

フレッドとジョージは、さすがビーターを務めていること也有つて 一撃に重みがあつた。

まるで ブラッチャーを投げつけられているような感覚なのだ。力技のフレッドは、コントロールに自信がない様子だったが それをジョージが補っているらしい。

そして ジョージは、力が籠っていないが そのコントロールは、神業そのもののように 思い通りに投げてくるので、受け止める方が大変なめになってしまつ。

ロンは、キャッチするのが何気に上手く 自信をえついたら いいプレイヤーになるかもしね。

その後 みんなでかわりばんこで ハリーの『ニンバス2000』に乗つた。

やはり ニンバス2000は、圧巻だ。

ロンが使つてゐる中古の箋『流れ星』だと そばを飛んでいる蝶にさえも、追い抜かれてしまつたのだから。

「あ～あ……やつぱり パーシー達も、一緒に加わればいいのに ロンは、面白くなさそうに 呟く。

赤毛の弟の言葉に フレッシュとジヨージも “ その通りだ ” とどこか訝しげな様子。

「パーシーの奴 忙しいことを理由に、断つたんだぜ？」

オリバーとオリビアだつて パーシーを手伝つてゐみたいだしさ？ 一体 何をやつているんだらうな？」

「まあ オリビアは、運動音痴だから 無理にしてもさ？」

だけどあのオリバーがクティッチをすることを断るだなんて 何か、波乱の予感だ」

ウイーズリーの双子の会話を聞きながら ハリーも、疑問の思ひ。パーシー達を見るのは、食事の時くらいなのだから。

「やつこさん等は、一体 何を考えているんだかな？」 フレッシュは、訝しげな表情を浮かべて 言つた。

話によれば ハリーがダーズリー家から救出される前日には、統一試験の結果が届いたそうだ。

「パーシーってばさ？」

12教科とも全部バスして 『12ふくろう』 だったのに…………――

「コリともしなかつたんだぜ？」

その言葉に 少年が、首を捻つてると ジヨージは 『ふくろう』 つてのはだな？” と 説明してくれる。

「15歳になつたら受ける試験で 普通魔法レベル試験……つまり 頭文字をもじつて 『O・W・L』 つてわけ」

それ聞いても ハリーにとつては、ちんぷんかんぷん。

「確か ビルも12じゃ なかつたつけ？」

下手したらこの家から また 首席が出るかもしれないぞ？」

「ビル つて 一番上のお兄さんだつたよね？」

去年 ハグリットがコッソリ育てよいとしていたドラゴンの赤ちゃん

んを引き取ってくれた チャーリーの2つ違いのお兄さんだっけ？

ハリーの言葉に 3人は“ ” “ そうだよ” “ ”と 同時に頷く。

「ビルもチャーリーも、ホグワーツを卒業してしまっていてね？

チャーリーは、ルーマニアでドラゴンの研究をしていくし ビルは、グリングォッソ銀行で働いているんだ」

「残念だったな？」

僕らがハリーを連れて家に戻つてくる前に 急な要請で、休暇を返上してエジプトに戻つちまつたらしい」

「あれ そうだったの？！」

久しぶりの家だから 昼近くまで 眠つてているのかと思つてた。

それか ミコリエル伯母さんの家にでも、顔を出しているのかと」

弟の発言に フレッドとジョージは、呆れ氣味で 溜息。

「いくら あのミコリエルに気に入られているからってさ？」

休み中にまで 顔を出しに行くほど 慕つてゐるわけでもないだろう？」

「そりそり あのミコリエルだぞ？」

僕らは、会つ度 文句を言われっぱなしでした？

仕事がなければ 間違ひなく リーフ達と飲みに行つてゐるかだ」

双子の兄2人の発言に 弟は、納得しているらしい。

「そういう パパもママも、どうやって 学用品を揃えるお金を用意するのかな？」 ジョージは、ふと 思い出したように呴いた。

同じ顔をした弟の言葉に フレッドも “ だよな～？” と 深く溜息をついてしまつてゐるようだ。

「ロックハートの本を5人分だもんな？」

ジーーだって さすがに ローブや杖やら、新しいのが必要になつてくるだろうしな？」

ブラウスとスカートは、オリビアのお古が 新品並みだから ジー

ーも、文句の言いようがないみたいだけど」

それを聞いて ハリーは、黙り込んでしまう。

親友とはいえ 他人の家庭の事情に関する会話が飛び交う中にはいる

のは、居心地がいのだから。

ロンドンにあるグリンゴッシュの地下金庫には、両親が残してくれた財産がかなり残っていた。

勿論 それは、魔法界でしか通用しない財産だ。

詳しく述べ知らないが ある魔法使いが経営している銀行を使えばマグルのお金と交換してくれるらしいが。

けれど この事を、ダーズリー夫妻に知られるつもりなどない。彼等は、確かに 魔法に関する事を恐れているかもしれないが

山積の金貨ともなれば 目の色を変えるかもしれないのだから。

これは、2人の息子である ダドリーのお墨付き。

ある一軒家では、1人の少女が、嬉しそうな表情を浮かべて、電話越しに会話をしていた。

「OK？」

じゃあ、みんなも、ダイアゴン横丁で落ち合つのね？」
話している少女は、チョコレート色の長い髪の毛をクルクルと回しているマリー・ベル・ウィルソンだ。

「時間？」

ダイジヨーブだつて！

去年だつて迷わなかつたんだから。

まあ、1人にしたら危ないかも知れないと。

大人数なんだから、大丈夫なんぢゃない？」少女は、苦笑しながら言う。

その言葉に、隣に立っている少年は、神妙な表情を浮かべてしまつている。

「うつわあ～ッ！」

ハーマイオニー……さつきからアルが、睨んできている。方向音痴なのは、本当の事なのに……本人は、全く持つて自覚しないんだものね？

本当に 困っちゃう。

図書室では、迷わないくせに ね？」

マリー・ベルは、クスクスと笑いながら 電話の相手＝ハーマイオニー・グレンジャーと 楽しそうに 話していた。

そんな姉の様子に アルデルト・ウィルソンは、溜息をついてしまつているようだ。

「いいの？！」マリー・ベルは、嬉しそうな表情を浮かべて 叫ぶ。姉の様子に アルデルトは、不思議そうな表情を浮かべている。そんな弟の様子に マリー・ベルは、ニッコリと微笑み 受話器をずらす。

「ハーマイオニーの両親が、ダイアゴン横丁まで 一緒に 送つてくれるって！
帰りも 荷物が多いだろうから 一緒にどうですか ですって。受けるわよね？」

去年は、去年で……ベネディクトが、車の鍵をどこかでなくしたりして バスで帰る羽目になつて 大変だったし」マリー・ベルは、息をつきながら 言つ。

その言葉に アルデルトは、苦笑しながら 頷いた。
マリー・ベルは、そんな弟の反応に 嬉しそうな表情を浮かべて ハーマイオニーに 話し掛けているようだ。

「OKよ？」

じゃあ 近くの公園で待つて いるわね？
目立つ所だから 分ると思うわよ？」

王立公園の場所は、わかるかしら…………そこから 南に直進して 小さな礼拝堂があつて…………そこなんだけど…………ん？
へえ…………ハーマイオニーの両親が知つて いるんだ？」

マリー・ベルは、苦笑しながら 電話を続けて いる。

そんな少女の様子を アルデルトは、微笑みながら 見つめていた。
後ろを振り返ると 祖父母が、苦笑しながら 覗き込んで いるようだ。

その視線を受けて 少年は、微笑みながら 頷く。

「ふうん 世界は、狭いわね？」

まさか 貴女の両親が、昔 このへんに住んでいただなんて。
でも まあ？

同じ顔をしているのに、出逢うのに 13年も掛かつたことがある
人達を知っているんだけどね？」

マリー・ベルの眩きに 受話器の向こうから、不思議そうな声が。
アルデルトは、息について “代わって？”と 姉に促す。

「あ……ハーマイオニー？

うん マリーから聞いたよ。

ダイアゴン横丁まで送ってくれるんだってね？

ロン達には、一緒に 買い物に行けるって？

そう…… わかったよ」

チョコレート色の髪をした少年は、苦笑しながら スラリと伸びて
いる足をその場で組む。

その様子を窺つている姉は、どこか首を捻つていた。
しばらくして 電話が終わつたらしく アルデルトは、受話器を置
いて どこか 難しい顔をしてしまつているようだ。

そんな弟の様子に マリー・ベルは “どうかした？”と 声を掛ける。
「まさか 厄介なことになっちゃつているとか？

だつて あのフレッド達が、ハリーをダーズリー家から救出したん
でしょう？

ところで 何で……ハリーと連絡が取れなかつたのかは、聞けた？

本人から聞くのが、一番なんだけど

「何だか 今年のホグワーツ、一波乱起こるかも。
邪魔が入らなかつたら、いいんだけどね？」

ハリー達は、水曜日の朝 早い時間帯から起^こされた。

今日 みんなで ダイアゴン横丁に向かうのだ。

一同は、ベーコン・サンドイッチを1人当たり 6個ずつ一気に飲み込み コートを着込む。

そして 暖炉の前に集まると モリーは、暖炉の上から植木鉢を取つて 中を覗いていた。

「アーサー？」

大分 少なくなつてしまつているわ？

今日 買い足しておかないといけないわね？」

その言葉に ウィーズリーの面々は、顔を見合わせててしまつているようだ。

けれど 気を取り直したかのように ウィーズリー夫人は、“さて”と 皆の顔を見回す。

「お客様からどうぞ？」

ハリー……お先にね？

オリバーとオリビアは、その後に続いて頂戴？」

そう言って モリーは、ニッコリと微笑み 少年を暖炉の中に立てて、鉢を差し出した。

けれど 眼鏡を掛けた少年は、どうしたらしいのかわからず すぐ前に並ぶ ロンに助けを求めているようだ。

そんな友人の様子に 赤毛の少年は“そりゃ”と 肩をすくめてしまう。

「ハリーは、煙突飛行粉^{フルパウダ}を使ったことがないんだ。

「ごめんよ ハリー？」

説明するのをすっかり忘れてたよ

フルーバウダー

「その鉢の中にある緑色の粉末は、『煙突飛行粉』って書いてね？

魔法界の各家庭には、魔法省による正式な手続きを踏んだ ネットワークが存在している。

で ほとんどは、暖炉とパウダーを使うことで ネットワークの繋がっている場所に移動することが出来るのよ

オリビアの説明を受けても 今のハリーは、焦りが絶好調になってしまっている。

「いいな？」

ハリーってば 一番先に、やらせでもらえるだなんて。

僕 いつも 最後の方なんだよ？」

ロンは、そう言いながら 羨ましそうな表情を浮かべていた。

友人のその言葉に ハリーは、困惑を隠せない様子だ。

双子どジニーも、期待の目を、眼鏡を掛けた少年に向いている。

そんな視線に ハリーは、尚更 不安を隠せない。

「ハリー…………いいかい？」

発音を はつきり と 言わないと いけないよ？

間違つてしまつたら とんでもない所に、飛ばされてしまうからね？
行き先を言うと同時に この粉を暖炉の中で投げつけるんだ」 アーサーは、真剣な表情を浮かべて 言つた。

その言葉に ハリーは、思わず 息を呑んでしまつているようだ。
ウイーズリーの面々は、少年の心境に 気がついている様子はない
が、オリバーとオリビアは、心配そうな表情を浮かべて 顔を見合
わせている。

「本当に 間違えるんじゃないぞ？」

前に オリビアが、とんでもない所に 飛ばされたからな？」 オリバ―は、苦笑しながら 言つ。

その言葉に 少女は、訝しげな表情を浮かべて オリバーを、蹴りつけた。

「ちょっと スペルを間違えただけじゃない！」

それに オリバーも、言えないでしょ？

貴方だつて あつちに行つちゃつた。

見事 私の上に落つこちて……変な魔法使いには、追い掛け回されるし 出口は、わからなかつたし。

本当に ホッグズ・ヘッドの主人がいなかつたら……大変だつたのよ？」 オリビアは、溜息をつきながら 言つ。

オリバーは、少女の攻撃に 苦悶の表情を浮かべてしまつてゐる。そんな2人の様子に 一同は、顔を見合せながら 苦笑するしかない。

「だが 去年は、どうやつてダイアゴン横丁まで向かつたんだい？」

確かに ハグリットが、君を迎えに向かつたらしいが」

ウイーズリー氏の質問に ハリーは、首を捻つた。

「確か 地下鉄に乗りました」

眼鏡を掛けた少年の言葉に オリビアは、思わず吹き出してしまつてゐるようだ。

「さすかし 目立つた旅になつたんじゃないの？」

だつて お世辞にも、あの身体の大きさでしょ？」

エメラルドの髪をした魔女見習いの言葉に ウイーズリー夫妻も、

どこか顔を見合わせてしまつてゐる。

他のメンバーは、その光景を頭に浮かべたのか 必死で笑いを堪えているらしい。

「地下鉄といふと ？」

友人に聞いた話なんだが？

エスカペーターというものが、あるのだろう？それは、一体 どんな物なのかね？」

「おじさん…… エスカペーターじゃなくて、エスカレーターですよ」

オリバーは、苦笑しながら 訂正を入れた。

息子の友人の言葉に ウイーズリー氏は、不思議そうな表情を浮かべてしまつてゐるようだ。

「それは、そうと？」

「一体 どうやつて……」「アーサーツ！」

夫が、またマグルの話題に興味を持ち出したので モリーは、その前に活を入れる。

「その話は、買い物から帰つても出来るでしょう？」

ハリーフルーバウダ 煙突飛行粉フローティング・スモークを使うとね？」

そのマグルの移動手段を使わなくとも、ずっと 早いのよ？ にしても 困ったわね？」

まさか 一度も コレを使った事がないだなんて。

「一度くらいは、あるんじゃないか」と 思っていたのだけど モリーは、そう言いながら 不思議そうな表情を浮かべて 溜息をついた。

ウイーズリー夫人の言葉に ハリーは、“すいません”と 悲しそうな表情を浮かべて 肩をすくめてしまっているようだ。

「魔法使いの事とかは、去年 知つたばかりだつたし。

まだ 知らないことも、たくさんあるんです」ハリーは、悲しそうな表情を浮かべて 呟いた。

そんなハリーの様子に モリーは、戸惑いを隠せない表情を浮かべてしまつている。

「まあ、簡単さ。

ただ 粉を持つて 行きたいところの面前を、叫んだら いいんだからさ？」

やつてみたら、なんでもないよ」「

フレッドとジョージは、ニッコリと微笑みながら “”僕たちを見ているんだ“”と 鉢の中からキラキラと光る粉を一つまみして取り出し ハリーの前に立つた。

そして そんな双子の行動に、何か気が付いたのか パーシーによつて、ハリーは 暖炉から、引っ張り出され 離される。

ウイーズリーの双子は、その様子を見届けて 粉を暖炉の炎に、投げてから “”ダイアゴン横丁！”“と叫ぶ。

次の瞬間 暖炉の中に「ゴー」という音と共に 真っ赤だつた炎は、エメラルド・グリーンに変わり 煙が消えた時には、双子の姿は 見えなくなつてしまつてゐる。

その様子に ハリーは、驚きを隠せない様子で 呆気に取られてしまつていた。

「じゃあ……次は、ハリーだ。

さあ あの子達と同じように、やつて『らん。

いいね?ダ・イ・ア・ゴ・ン・横・丁だよ?」

アーサーは、そう言つて ニッコリと微笑を浮かべていた。

ハリーは、その言葉に 息を呑みながら、頷いているようだ。

「肘を引っ込めていた方がいいよ。

それに 目を閉じてね?

煤が、顔中に飛びかかつてくるんだからさ?

それに、モゾモゾ動かないこと。回転に身を任せていなかつたら とんでもない暖炉に振り落とされちゃうことになるんだからさ?」

ロンは、真剣な表情を浮かべて 忠告。

「だけど 慌てては駄目よ?」

あまり急いで外に出ようとしないでね?

先に向かつたフレッドとジョージの姿が見えるまで 待つのよ?」

色々な言葉を頭の中に叩き込み ハリーは、煙突飛行粉の入つたハ の中に手を突つ込み 一つまみを取つて、暖炉の前に進み出る。 深呼吸して、粉を炎の中に投げ入れ、中に入った。

炎は、暖かいそよ風のようで 熱くないようだ。

そして、意を決したかのように 粉を掴み、暖炉の中で 叫ぼうと 口を開く。

けれど、その途端に 嫌というほど熱い灰を吸い込んでしまつた。

この結果 ハリーは“ダ……ダイア……ゴン横丁ッ!”と 咽ながら叫んだようだ。

その様子に 見守っていた面々は、顔を真っ青にさせて 顔を見合 わせてしまう。

「今 ハリー、ちゃんと 発音できていなかつたな。

経験から、言うと あつちに 行つちゃつたかもしれない。

向こうは、色々と 閻の魔法使い関係も見るようだから 「厄介なの

に」 オリバーは、神妙な表情を浮かべて 呟いた。

その言葉に ウィーズリー夫婦は、心配そうな表情を浮かべて 顔を見合わせてしまつているようだ。

「そんなんッ！

どうするの？！

ハリーは、まだ この世界のことを、何も知らないんだよ？！

しかも 屋敷しもべ妖精の、警告もあるし 危ないかもしれないじゃないか！」 ロンは、泣きそうな表情を浮かべて 叫ぶ。

赤毛の少年の言葉に 他のメンバーも、心配そうな表情を浮かべている。

「私 ハリーを追いかけます！

ウィーズリーの人達が、行つたら 変に思われてしまうかも知れないかも知れないけど 私だつたら また 迷い込んだ事で 納得されるでしょ うしつ！」

オリビアは、そう言つて 自分のポケットから、粉を取り出し 暖炉の中から、消えていった。

そんな少女の姿を見つめて 一同は、神妙な表情を浮かべて 顔を見合わせる。

「とにかく 私達も、向かおう。

次にやつてこない 私達に フレッドとジョージが、心配しているはずだ。

変な行動を起こしてしまつ前に……」 アーサーは、真剣な表情を浮かべて 呟く。

父の言葉に ウィーズリーの子供達は、心配そうな表情を浮かべてしまつているようだ。

「何だか 今年も、何か 起きそうだな？

最初は、てっきり クディッチ関係で、ハリーに脅しをかけてきた

のかつて思つていたけど。

話を聞いているとやつぱりさ?

それだけじゃ、ないようだし」オリバーは、神妙な表情を浮かべて呟いた。

友人の言葉に、パーシーは、呆れた表情を浮かべ、ずれた眼鏡を、直しているようだ。

「お前の思考の中は、クディッチだけなのか?
この前の、O·W·Lの結果 良くなかったんだろう?
将来 教師になりたい つて 考えている奴が、変なこと考えるな
よ。

一応 生徒になるかもしねないんだからさ?
連中も 口には、出したくないけど」

赤毛の青年は、そう言って オリバーの額を、小突く。

パーシーの様子に 青年は、苦笑しながら 暖炉の中で消えていく

ウイーズリーの家族を見つめ 真剣な表情を浮かべている。

「オリビアが、追いかけたから 大丈夫だとは、思うけど。

それに 今日は、ハグリットがあそこに向かうらしい つて 聞

いたからね?」青年は、息をつきながら 言つた。
オリバーの言葉に、パーシーは、訝しげな表情を浮かべてしまつて
いるようだ。

「とにかく 話は、後にしよう?

まずは ダイアゴン横丁に、行かないと」

パーシーは、息をつきながら 粉を片手に、暖炉の中へと入つてい
く。

オリバーも、その後に続き 持参してきた 粉を取り出し ダイア
ゴン横丁へ向かう。

まるで 巨大な穴に渦を巻いて吸い込まれるような感覚だつた。
耳は、聞こえなくなつてしまつのではない か と 思えるくらい
高速で回転しているようだ。

目を何とか開けようと努力したが 周りに立ち込めてくる 緑色の
炎で気分が悪い。

肘は、何度も何かにぶつかつてしまい シックカリと引く。

回る……回る

今度は、冷たい手で頬を打たれた感じがする。
眼鏡越しに目を細めてみると 輪郭のぼやけた暖炉が、次々と目の
前を通り過ぎていく。

中には、その移動中の少年と目が合つてしまつたらしい 幼い女の子
が近寄ってきたが すぐに違う暖炉へと移つてしまつ。
胃の中では、先ほど詰め込んだ ベーコン・サンドイッチが、ひつ
くり返つて いるらしい。

まだ 終わらない移動に 早く終わればいいのにと 諦めたように
目を閉じた。

ふと その思いが通じたのか 前のめりに倒れてしまつたようだ。
冷たい石に顔面から突っ込んでしまい 眼鏡のレンズが砕けたのを
自覚する。

頭が朦朧とするのと痛みを感じながら 顔が煤だらけになつて いる
ことに気が付いた。
辺りを見回してみると 誰もいないようだ。

けれど　ここは、一体　どこなのか？

それに　何で　先に向かつたはずのフレッドとジョージがない？
煙突飛行粉フルパウダーを使ったネットワークを通じてきたのだから　ここは、

魔法使いの家の倉庫か　店なのだろう。

暖炉は、薄明かりの中にあり　並んでいる物といえば　ホグワーツの必要なリストに載りそうもない物ばかり。

手前のショーケースには、クッショーンに載せられた『しなびた手』と血に染まつたトランプに何かの義眼がギョロギョロと目を剥いている。

壁からは、邪悪な表情の仮面が見下ろし　カウンターには、人骨がまばらに山積に。

天井からは、錆付いた棘だらけの道具がぶら下がっていた。埃で汚れたウィンドーの外に見える狭く暗い通りから　ここは、絶対にダイアゴン横丁ではないようだ。

本能で　ハリーは、一刻も早く　ここから出なければならないと自覚する。

何とか出口を見つけ　コツコツとここに向かおうとしたが　ガラスの向こうから2つの影が見えた。

その1人は、こんな無様な姿を見せたくない相手　ドラコ・マルフォイだ。

少年は、急いで見回し　暖炉のすぐ前の脇に大きな黒いキャビネット棚を見つけ　その中に入り込む。

それと入れ違いに　マルフォイが、自分と瓜二つの男を連れて　店の中に入ってくる。

男は、間違いなく　父親：ルシウス・マルフォイなのだろう。

息子と同じ血の氣の無い顔に尖った顎……そして　冷たく暗い灰色の目をしているのだから。

マルフォイ氏は、陳列の商品に何気なく目をやり　店の奥まで入ってきた。

「ドラゴン……一切　触るんじゃないぞ？」

後で 競技用の箒を買つてやるから 大人しくしている」男は、力
ウンターのベルを鳴らし 息子に向かつて声を掛けたようだ。
父の言葉に プラチナブロンドの少年は、面白くなさそうな顔。
「父上…… そんなの量の選手に選ばれなきゃ 意味がないじゃな
いか」

こんな子供のように拗ねたドラコの様子を見たことがない。

「ハリー・ポッターなんか 去年 ニンバス2000を貰つていた。
グリフィンドール寮チームでプレーが出来るよう……ダンブルド
アが、特別許可を出したんだよ。

あいつは、そんなに上手いわけでもないのに…… 単に 有名人っ
てだけで。

額に馬鹿な傷があるから 有名なだけなのに」

少年は、面白くなさそうに 閣體の陳列棚を覗いている。

「…… どいつもこいつも、ハリーがかっこいいと思つているんだ
よ。

マリーだつて アルトだつて、同じグリフィンドール寮に組み分け
されたもんだから そう思つてるんだ。

額に傷、手に笄の素敵なポッター つてさ?」

息子の愚痴に ルシウスは、“何度目だらうな”と 溜息をつく。

「お前は、ホグワーツから戻つてくるなり ずっと 同じことを言
つているじゃないか」

そして、ふと マルフォイ氏は、息子を視線だけで 押さえつける
ように睨みつけた。

「あのウイルソンの双子と親しくすることは、勧められないぞ?

いくら あの2人の父親が、ナルシッサの弟だとしててもだ。

それに ハリー・ポッターを好きではない という 素振りを見せ
るというのは、何と言うか 賢明ではない。

特に 今は、大多数の者が彼を、闇の帝王を打ち消した ^{ヒーロー}英雄とし
て扱っているのだから。

だが その後は…… やあ、ボージン君」

ふと 猫背の脂っこい髪をした 小太りな男が、カウンターの向こうから現れたようだ。

「マルフォイ様 また、おいでいただきまして嬉しうひざります
ボージン氏は、髪の毛と同じくらい脂っこい声を発す。

「共栄至極で」ござります。

それに 今日は、若様まで…… 光榮でござります。

手前共に 何のご用件で？

本日入荷しました品をご紹介しましょうか？

お値段の方は、お勉強させていただき…… 「買いに来たのではない

店主の言葉を遮つて ルシウスは、言葉を続ける。

「ボージン君 今日は、買いに来たのではなく 売りに来たのだよ」

その言葉に ボージン氏の顔からは、笑いが薄らぐ。

「当然聞き及んでいると思うが 魔法省が、抜き打ちの立ち入り調査を仕掛けることが多くなってね？」

私も、少しばかり ここに載っている物品を持つていてね？
もしも 役所の訪問を受けた場合 都合が悪い思いをするかもしれない

ない」

マルフォイ氏は、そう話しながら 内ポケットの中から、羊皮紙の巻紙を取り出し 猫背の男に読めるように広げた。

「ですが 魔法省が、貴方様にご迷惑をおかけするでしょうか？」

その言葉に ルシウスの口元は、“魔法省の訪問は、まだない”とニヤリとしたようだ。

「マルフォイ家の名前は、名前は変わったにしても その血筋は、古き時代から連なるもので、それなりの尊敬を勝ち得ているのだからね？」

だが 役所は、富に小うるさくなつていいのだよ。

しかも マグル保護法の制定の噂もある。おそらく あの風つたか
りのマグル蠶膚である アーサー・ウイーズリーが、糸を引いてい
るのだろうが、「

それを聞いて ハリーは、熱い怒りがこみ上げてくるのを感じる。

ふと “父上ッ！” と ドラゴの声が聞こえてきた。

「父上……これは、一体 どのようなものなのですか？」

その示されている品に ボージンは、“ああ 「輝きの手」 で” いります” と 目を輝かせているようだ。

「蠟燭を差し込んでいただきますと 手を持っている者にしか見えない灯りが点ります」

つまり 泥棒や強盗には、打つてつけの品らしい。

その後 再び 大人同士の交渉が始める。

ドラゴは、そんな会話に面白くないのか 店内を歩き回るので、ハリーにとって 気が気でない。

ふと プラチナブロンドの少年は、絞首用の長いロープの束の前に立ち止まり しげしげの眺め 豪華なオパールのネックレスの前に立てかけてある説明ガキを読みながら ニヤニヤしていた。

ご注意 手に触れないこと

呪われたネックレス これまでに19人の持ち主のマグルの命を奪つた

ドラゴは、そのまま向きを変え ちょっと店の前にあるキャビネット棚に手を留めたようだ。

前へと進み 手を掴もうと 手を伸ばす。

その時 息を殺している ハリーの背後の暖炉から 小さな悲鳴が聞こえてきた。

店にいるメンバーは、その声に 驚きを隠せない様子で 顔を見合わせてしまつていていた。

「あたたた……本当に ここって どうして ホコリ臭いんだろう」 オリビアは、溜息をつきながら 呟いた。

エメラルドの髪をした少女の姿を確認して ボージン氏は、訝しげ

な表情を浮かべてしまつてゐるようだ。

マルフォイの父親は、少女にカウンターの前に出している品が見えないよう 奥へと押しやつてしまつたらしい。

オリビアは、ハリーの姿を確認すると 彼等に見えなによつて 立ちはだかり 棚から出るように指示する。

「アンタ また 発音を間違えたのかい？

まったく 本当に わざとじゃないんだらうね？

出口は、何度も来ているんだから わかつてゐるだらう? 「猫背の男は、訝しげな表情を言って オリビアに言つ。

ルシウスは、眼鏡を掛けた少女の姿を確認して どこか訝しげな様子。

「確か 君は、去年から グリフィンドール寮の監督生を勤めているお嬢さんだつたかな？」

その質問に オリビアは、難しい表情を浮かべて “ そうですけど？”と 振り返つた。

「噂は、聞いている。

マグル出身者でありながら 他の純血の子供達を押さえ 上位な成績を保持しているそうだな?

うちの息子も、同じ学年のグリフィンドール寮のマグル出身のお嬢さんに全科目の試験で負けてしまつてゐるようだし。しかも エドワードの娘には、魔法薬で だいぶ差をつけられてしまつてゐるようだからな?

どこの教師が、羨戻にするにも 無理があるだらう 「

その言葉には、どこか棘があるようだ。

「」の頃は、魔法家系でもない者に優越な立場を取れるなど ホグワーツも落ちたものだ

ハリーは、怒りを覚え ドラゴンに視線を向けてみると 恥と怒りの混じつた 奴の顔に 意地悪な笑みが見える。

「Ms・シフォン…………これからも 魔法界で生活するつもりなのならば あまり でしゃばらないことだ。

でなければ、あの時、助かつたことが間違いになつてしまつだらうからな？

それとも、早く、ご両親に会いたいのかな？

仇を取るにも、厄介なことになつてしまつだらうじ。姿を隠している少年と、プラチナブロンドの少年は、意味がわからぬ顔をして、いる様子だったが、ボージンは、何かを思い出したのかニヤニヤしていた。

オリビアは、しばらく黙っていたが、すぐに顔を上げて、“ご忠告、感謝いたします”と微笑んだ。

“ですが、彼方の言葉で表すのならば、私は、場を弁えておりませんので、お約束出来かねます。

それに、私は、

恩を仇で返すつもりはありません。

全ては、眞実を明らかにする為、尽力するだけですから、エメラルドの髪をした少女は、そう言い残すと、”それでは、失礼します”と、自分のマントで見えなくしている、ハリーと一緒に店を後にする。

「おお、お前ら、こんなところにおったのか」

店を出ると、そこには、ルビウス・ハグリットが、心配そうな表情を浮かべて立っていた。

その姿を確認して、ハリーは、安堵の息を漏らしていくようだ。

「ハグリット……ちょうど良かつたわ？」

ハリーが、見えないよう、歩いてくれる？

私だけだと、ちょっと、限界かもしれないの」オリビアも、胸を撫で下ろしながら、言つ。

その言葉に、ハリーは、不思議そうな表情を浮かべてしまつていて、ようだつたが、ハグリットは、何か、気が付いたようで、神妙な表情を浮かべているようだ。

眼鏡を掛けた少年の様子に気が付いたのか、ハグリットは、真剣な表情を浮かべて、少年の顔を覗きこんだ。

「ここは、『夜の闇横丁（ノクターン横丁）』。

『例の人』が、本拠地としていた街でもあるんだ。だから、あの魔法使いが滅んでからも、崇拜していた連中が、集まる場だ」

ハグリットの言葉に、ハリーは思わず、息を呑んでしまう。

そんな少年の様子に、オリビアは、小さく溜息をついてしまつて、ようだ。

「下手したら、貴方を殺す事で……『例の人』を超えるら、て、襲い掛かってくるかもしれないしね？」少女は、息をつきながら、言つ。

その言葉に、ハリーは、不安そうな表情を浮かべ、ハグリットとオ

オリビアを、見ているようだ。

「にしても オリビアも、無茶な事をするな～？」

お前さんは、毎回 こっちに 来ちまっているんだろうから……他の誰よりも 怪しまれないのは、確かかもしれんが。

監督生らしからねえ 行動なんじやねえか？」 ハグリットは、苦笑しながら 言つた。

ハグリットのその言葉に オリビアは、肩をすくめてしまつて いるようだ。

そんな少女の様子に ハリーは、思わず 苦笑してしまつ。

「けど どうして、僕らがここにいる って？」

ハリーは、そう言つて 不思議そとに 首を傾げた。

「ああ アーサー達に聞いたんだ。

おんのが、今日 ここに来る事を、オリバーに 話していたからな？ ちゅうどいい って 考えたんだろ？

アーサーやモリーが、下手に動き回ると 「厄介だろ？から」

ハグリットは、苦笑しながら 言つ。

どうやら ハリーが、ダイアゴン横丁に着いていない事を確認し すぐに ウィーズリー家の皆が 事情を説明してくれていたらしい。 その話を聞き ハリーは、申し訳なさそうな表情を浮かべて 肩を すぐめてしまつた。

少年のそんな様子に ハグリットとオリビアは、戸惑いを隠せない 様子で 顔を見合わせる。

「ところで あの店に、出たんだな？」

何か 危ないもんには、触れていいか？」 ハグリットは、神妙な 表情を浮かべて 呟いた。

「うん 觸つてない。

だって どこなのかも、わからなかつたし。

何か 店の中にあるもの、全部 嫌な感じがしたもん

ハリーは、真剣な表情を浮かべて 頷く。

オリビアも、その横で 息をつきながら、頷いているようだ。

「それは、初めてあの店に迷い込んだ時に同じ感覚がしたわ？しかも全部不気味な品物ばかりなんだもの……マグルが呪われて不振な死に方をしたとか注意書きもあつたし」

2人の言葉にハグリットは満足そうな表情を浮かべてハリーとオリビアの頭を優しく撫でてくる。

「店の中にマルフォイ父子がいてね？」

帰り際嫌味と警告をされたわ」オリビアは訝しげな表情を浮かべて言った。

その言葉にハグリットは険しい表情を浮かべてしまっているようだ。

ハリーは、そんな2人の様子に不思議そうな表情を浮かべて、首を傾げてしまっている。

「ルシウス・マルフォイか……。

でハリーの顔は見られていねえだろうな？」ハグリットは真剣な表情を浮かべて言った。

その質問にオリビアは息をつきながら頷く。

「ちょうど親子の死角になっていたから。

ですぐにローブで遮った。

まだハリーの身長が高くなくて助かったわ？

ギリギリだったんだもの。歩き方変だったからドラコには笑われていたようだし」

オリビアの言葉にハリーは複雑そうな表情を浮かべて肩をすくめてしまっているようだ。

「気にはんなよハリー？」

少しずつだがお前も成長しているんだ。

去年初めて会った時よりもでかくなってるぞ？

服だって小さくなったりしているんじゃねえか？」ハグリットは微笑みながら言つ。

その言葉にハリーは嬉しそうな表情を浮かべているようだ。

オリビアは、そんな少年の様子に苦笑しながら見守っている。

「そんなことに なつて いるの。

大丈夫なのかしら。

そこつて 危険な場所なんでしょう?」 ハーマイオニーは、溜息をつきながら 呟いた。

少女の言葉に ロンは、肩をすくめてしまつて いるようだ。
「でも 大丈夫なんじゃない?

ハリーって 何気に 運がいいみたいだし。

去年だつて……それを搔い潜つて、クイレル先生に寄生していた

『あの人』を、倒したんでしょう?」 マリーベルは、おいしそうに クッキーを食べながら、呟く。

姉の言葉に アルデルトは、呆れたよつに 溜息をついてしまつている。

「不謹慎だよ?

もしかしたら ハリー 危ないかも しれないのに。

それに オリビアだつて……」 アルデルトは、心配そうな表情を浮かべて 呟いた。

その言葉に ロンとハーマイオニーも、不安を隠せない様子で 顔を見合わせて しまつて いるようだ。

一同は、ダイアゴン横丁で 合流を果たす。

ただ ハリーとオリビアがいないことに 対して ハーマイオニー や ウィルソン姉弟は、戸惑いを隠せないで いるようだつたが 事情を聞き 納得してくれていた。

先に 横丁へとやつてきていた フレッドとジョージも 心配してしまつて いるようだつたが、両親の話を聞き 安堵したようだ。
子供達の様子に 少し離れた場所にいる 大人達は 微笑ましそうな表情を浮かべている。

「でもさ?

そんな心配は、 いらないよ。

オリビアは、ある意味 危険を幸運に 変えるから

青年のその言葉に一同は、不思議そうな表情を浮かべて顔を見合わせた。

「だな？」

1年生の時から友達やつているけど本当に不思議な事ばかりだし。

その運を面白がられて監督生に選ばれたらしからな？

最初本人は、乗り気じゃなかつたらしいけど。

孤児院じゃちびっ子の世話していることもあつて……面倒見がいいから」パーシーは苦笑しながら言う。

「オリビアは、孤児院の出身だったの？！」

初めて聞いたわ？」ハーマイオニーは、目を大きく見開きながら呟いているようだ。

「うん……本人がいないとこで言うのもなんなんだけどさ？」

11年前マグルの大通りで大量殺人が起きたのを知っているかい？」

パーシーの言葉にハーマイオニーは、”知ってるわ？”と頷く。

「私の幼馴染のご両親も、その犠牲者だつたから。

毎年お花を供えに行つてているけど……未だに当時の惨状が、残つている箇所があるわ？」

「そういえば……マグルのニュースでも、取り上げられていたんだっけね？」

犠牲者のほとんどは、マグルだつたからオリバーは遠くを見上げる。

「あたしがまだ赤ん坊の時の事件？」

『例の人』が滅んだ後物騒な事件が続いたと聞いたことがあるわ？」

ジニーは、真剣そのもの。

ハリーの前にいる時の落ち着きのない様子とは違い落ち着きを払つてゐるらしい。

「ああ……その犯人は、死喰い人だつたんだ。
ある夫婦を死に追い込んだ 魔法使いさ。

その男は、追い詰められて マグルの大通りで 近くにいた マグルを巻き込んで 虐殺した。

オリビアとその両親は、その場に居合わせていて……彼女は、何とか助かつたんだけど ご両親は……

それを聞いて ロン達は、息を呑んでいた。

「ねえ…… その犯人は、どうなつたの？」

ロンは、”勿論 捕まつたよね？”と 真剣な顔だ。

「犯人とされた 魔法使いは、アズカバンに投獄されているよ

兄の発言に 弟達は、顔を見合わせる。

「アズカバンなら 大丈夫だよ。

あそこは、誰にも 脱獄できないんだから

「ところで その死喰い人デス・イーターが、死に追い込んだ ある夫婦つて？」

ハーマイオニーは、唾を飲み込みながら 嘎いた。

栗毛の少女の質問に 他のメンバーも、ハツとしたようだ。

パーシーとオリバーは、歯切れが悪い。

「その夫婦つていうのは、ハリーの両親でしょう？

アズカバンに投獄されているのは、シリウス・ブラック」 ずっと

黙りっぱなしだった アルデルトが、言う。

ロン達は、それを聞いて 言葉が見つからない。

「彼は、私達の父親の従兄。

私達の大好きな従姉の父親よ」 マリーベルは、溜息をつきながら 嘎いた。

「2人の親族が アズカバンに投獄されているっていう話は、聞いていたけど…… まさか シリウス・ブラックだつたなんてな。

ハリーが、聞いたら…… 厄介そうだ」

「いや…… ハリーは、迷いさえするかもしれないけど それを理由に マリー やアルと仲違いは、しないと思うぞ？」
フレッドの言葉に ジョージは、真剣な顔だ。

「そうだな？」

ハリーは、人を見る目があるだろうから。
ちゃんと わかつてくれるはずさ」パーシーは、眼鏡を押さえて
言う。

その時 店の後ろから 爆発的な歓声が、聞こえてきた。

「な……何？！」

「一体 何があつたんだろ？」

ロンは、胸を押されて 落ち着こうとしているようだ。

「サイン会みたいよ。

ギロデロイ・ロックハートが、自分の著書の本にサインする催しな
んですって。

その前に 予言新聞のインタビュー取材もあるみたいだけど
声に反応して 振り返つてみると ウェーブの掛かった 鶯色の髪
の少女が、興味なさそうに 店の中の中央の山積の本の置かれてい
る テーブルを指差す。

ハーマイオニーとジニーは、それを聞いて 嬉しそうな顔になる。

「あれ……チイ？」

今日は、どうしたの？

ダイアゴン横丁に一緒に行くのか聞いたら……人ごみは、嫌いだ
から って 言つたじゃない」マリーベルは、呆れたように 呟いた。
た。

どうやら 知り合いのようだ。

「手当て用の包帯が、足りなくなっちゃったんだけど……サツキ

達 手が離せなくてね？」

代わりに 買いに来たの。

前を通りかかったら……アンタ達の姿が、見えたから

少女は、苦笑すると ロン達に向き直る。

「一応 初めまして。

チエミ・ミナモト……スクイブよ。

マリーもアルも 遅くならないようにね？」

何か

「

チエミは、一ツコリと微笑んで、”それじゃあねえ〜？”と手を振つて店を後にして。

入り口付近の黄色い声は、どんどん大きくなり、人だかりが、出来始めているようだ。

ハリーは、ダイアゴン横丁に到着すると ウィーズリーの面々が待っている という 書店へと向かつた。
ハグリットが、2人を見つけると すぐ アーサーに 知らせてく
れていたそうだ。

書店の中では、ロンやウイーズリーの双子にパーシー オリバーと
ウィルソン姉弟がいる。

「良かつた ハリー！！

無事だつたんだ……オリビアもさ？

もしかして 危ない魔法使いに、捕まつたりしていいか ってさ
？」 ロンは、嬉しそうな表情を浮かべて 眼鏡をかけた少年の方に、
抱きながら 言つた。

その言葉に ハリーは、照れくさそうな表情を浮かべてしまつてい
るようだ、

「あら その言い方だと 私は、ついでのようなんだけど?
ロナルド少年 それは、どういう意味なのかしらね～?
何だか、年上に対する 言葉使いが、違つてゐるような 気がする
んだけど～？」

オリビアは、呆れた表情を浮かべて 眼鏡を掛け直しながら、ロン
に詰め寄つていく。

そんな少女の様子に ロンは、泣きそうな表情を浮かべてしまつて
いるようだ。

「おいおい 人の弟を、泣かせるなよ？
自分だって 弟がいるんだから……僕の言いたいことは、わかる
だろう？」 パーシーは、溜息をつきながら 言つ。

その言葉に オリバーも、赤毛の青年の隣で 苦笑してしまつて いる た。

オリビアは、そんな友人2人の様子に 肩をすくめてしまつて いる ようだ。

「けど オリビアも、すいわよね？」

だって……同じ場所に 飛ばされるとは、言えないのに」 マリー ベルは、苦笑しながら 言う。

姉の言葉に アルデルトも、感心したように 領いているようだ。 「そうだよ……もしかしたら 変な連中に 連れて行かれちゃつ たかもしれないんじゃない？」

あそこでは、よく 魔法使いの子供が、攫われる事があつたんじ ょう？

もし そうなつちやつていたら

少年の言葉に 一同は、驚きを隠せない様子で 顔を見合わせた。

「確かに 閻の帝王が生きていた頃は、そんな事件が 多発して いたらしいな？」

確かに ここでは、なかつたらしんだけど 閻の魔法使いに、攫われて 呪いを受けた 子供も、いたらしい」 パーシーは、悲しそうな 表情を浮かべて 呟く。

その言葉に 一同は、神妙な表情を浮かべて 顔を見合わせて しまつて いるようだ。

「ところで 他のみんなは？」

いくらなんでも、ハーマイオニーだつて もう ダイアゴン横丁に 着いて いるんでしょう？

もしかして 彼方達は、グレンジャー家と一緒に 来たの？」 オリビアは、不思議 そうな表情を浮かべて 呟いた。

「まあね？」

だつて、僕達 ハーマイオニーの家の車で、連れてきてもうつたし。

何か 心配だつたけど、安心したよね？」

アルデルトは、そう言いながら 苦笑して いるようだ。

「本当にあの安全運転 誰かさんに見習つてもらいたいわ？」

「どうして……あんなに暴走させちゃうのが、わかんないんだけど」マリー・ベルは、大きく溜息をつきながら言った。

そんな双子の様子に ハリーは、不思議そうな表情を浮かべてしまつていてるようだ。

「ハーマイオニーだつたら 外に群がつてるよ」ロンは、落ち着きのない様子で 辺りを見回してしまつてはいる、少年に囁いた。その言葉に ハリーは、不思議そうな表情を浮かべて 首を傾げている。

「今度の『闇の魔術に対する防衛術』の先生さ?

あのギロデロイ・ロックハートだつたんだ。

今 あつちで サイン会をしているんだ。

それで ウィーズリーおばさんやハーマイオニーとジニーは、嬉しそうに その場に向かつてはいる「オリバーは、苦笑を噛み締めながら 呟いた。

ロンは、その言葉に 少し、訝しげな表情を浮かべてしまつてはいるようだ。

そんな赤毛の少年の様子に ハリーは、不思議そうな表情を浮かべて 首を傾げた。

「ママとジニーは、家にいる時から ファン魂を炸裂させてはいるからわかつてしたことなんだけさ?」

意外なのは、ハーマイオニーだよ。

なんだつて また 魔法使いの有名人に 熱を上げてはいるんだか。

ただの「ハーボーじゃないか」ロンは、呆れ果てたように 呟いた。

「ハーマイオニーのご両親も 付いてはいるみたいだよ?」

何か 面白そうちから、つてね?

話していたら ハーマイオニーつてば、面白いの。

勿論 両親もね?」マリー・ベルは、クスクスと笑いながら 言つ。

何でも 車の中やダイアゴン横丁についてから、色々と会話を弾まっていたらしい。

その話を聞き ハリーは、どこか 複雑そうな表情になつた。

少年の様子に 一同は、顔を見合させて 不思議そうな表情を浮かべて、顔を見合させてしまつ。

ハリーの真意に気が付いたのか パーシーやオリバーとオリビアは、神妙な表情を浮かべて 顔を見合させてしまつてゐるようだ。

その時 背後から、少女の弾むような声が 聞こえてくる。

「ハリー！無事に 出り着いたのね？！」

振り返ると ハーマイオニーが、栗色の髪を靡かせて 駆け寄つて來た。

ジニーも、嬉しそうに本を抱きしめて 顔を赤らめでいるようだ。

その様子に ハリーは、苦笑しながらも ニッ 「リと微笑んでいる。「本当に 良かつたわ？」

事情は、手紙で 教えてもらつたけど 大変だつたんでしょう？

伯母夫婦に、閉じ込められて。

その上 私達の手紙を、屋敷しもべ妖精に 隠されてしまつて いたんでしよう？」 ハーマイオニーは、訝しげな表情を浮かべて 言つた。

「本当に 心配かけちゃつたみたいだね？」

ハリーは、苦笑しながら ハーマイオニーを見つめ返して いる。

「まあ ロンなら ともかく ハリーからの返事が来なかつたもの。やつぱり 心配したわ？」 ハーマイオニーは、息をつきながら 呟いた。

赤毛の少年は、栗色の髪をした少女の言葉に 訝しげな表情を浮かべてしまつて いるようだ。

そんなロンの様子に 他のメンバーは、顔を見合させて 吹き出していた。

グレンジヤー夫婦は、娘の様子に 顔を見合させてしまつて いるようだ。

「あら ハリーってば 眼鏡が 壊れちやつて いるわ？」

それに 蜘蛛の巣も、髪についちゃつて いるようだし

ハーマイオニーは、訝しげな表情を浮かべて ハリーの頭を、撫でた。

そして その仕草と一緒に 眼鏡を直してくれたようだ。

ロンは、そんな2人の様子に 目を見開きながら、ガタガタと 身体を震わせてしまう。

そんな赤毛の友人の反応に 一同は、不思議そうな表情を浮かべて顔を見合わせる。

「気にするなよ。

ロンってば 蜘蛛が大嫌いなんだ。

昔 大切にしていたぬいぐるみを、大蜘蛛にかえられちゃったものだから。

それ以来 蜘蛛と聞くだけで 泣きそうになるんだ」 ジョージは、苦笑しながら 言つた。

何でも その悪戯を実行したのは、フレッドらしい。

ロンは、恨めしがるように 双子の青年を、睨みつけている。

フレッドは、そんな視線に 笑いを噛み締めながら、弟をからかうような 仕草をしていた。

「だけど そんなにすごい人なの?

ギロデロイ・ロックハートっていう魔法使いは。

今学期から ホグワーツで、先生になるんでしょう?

自分の書いた本を授業用に指定するだなんて 相当な自信家なんだね?」 ハリーは、不思議そうな表情を浮かべて 言つ。

そんな少年の様子に ハーマイオニーは、呆れたように 溜息をついてしまっているようだ。

「すごいのよ!

だつて あんな勇敢な人なのよ?

それに カッコイイし。

まあ パパの知り合いの人も、美男子な人がいるけどね?

ロックハートも、ハンサムなんですもの。

きっと 素敵な授業になるんでしょうね? 何だか ワクワクしてき

ちやつた

少女の言葉に ロンは、 “ やつぱ、 ミーハーだ ” と 悪態をつく。
そんな赤毛の少年の様子に ハーマイオニーは、 訝しげな表情を浮かべて 無言のまま、 足を踏みつけた。

ロンは、 その衝撃に 悲鳴を上げてしまい 一同は 気の毒そうな表情を浮かべて 顔を見合わせてしまっていいるようだ。

「 ふん …… 隨分と騒がしいと思つたら 君達だつたのか 」

直ぐ近くの階段の上から 嫌味を込めた 声が聞こえてきた。

一同が嫌そうな表情を浮かべて り返つてみると 予想通り 踏ん 反り返つた ドラコが扉の前に。

隣には、 父親のルシウスも控えているようだ。
嫌味な少年の言葉に ジニーは、 初めて “ 黙つて ” と ハリーの 前で声を発す。

「 何だ …… ポッター ?

ウィルソンやグレンジャーだけじゃ 飽き足らず 新しいガールフレンドも出来たのか ?

その言葉に 赤毛の少女は、 顔を真っ赤にさせてしまつている。

「 最近の子供は、 隨分 場を弁えない輩が、 増えてしまつて いる ようだな ?

しかも ここ最近 マグルでも この町を自由に出入りするよつになつてしまつたようだ」

ルシウスは、 そう言いながら 皆を見回すと 鼻で笑う。

そんな男の反応に ウィーズリー兄弟は、 訝しげな表情を浮かべてしまつていた。

男の見下すような視線を受けて 栗色の髪をした少女は、 身震いしてしまつて いるようだ。

娘の様子に グレンジャー夫婦は、 訝しげな表情を浮かべて ルシウスを睨みつけて いる。

「 これは これは、 マルフォイさんじやありませんか ?

一体 何をお企みで ?

このような場所は、貴方のような魔法使いの一族が嫌いもではないでしょうか？」

店の中の様子に気が付いたのか アーサーが、難しい表情を浮かべて入ってきた。

隣には、心配そうな表情を浮かべた モリーが……。その姿を確認して ルシウスは、明らかに 嫌そうな表情を浮かべているようだ。

「ふん……確かに 言えているな？

こんな俗に紛れた場所など」

ルシウスは、訝しげな表情を浮かべて ロックハートの著書の本を、息子に手渡す。

本当は、来たくもなかつたが 指定された本が、ここでしか売られていなかつたため 訪れたらしい。

そして モリーとジニーに視線を移すと 2人の前にある 大鍋の中から 本を引っ張り出した。

「ほお～？

やはり 兄弟の下がりを使っているのか。

「 ウィーズリー家も 大変だな？

後悔しているんじゃないかな？

あの時の事を

男の言葉に モリーは、顔を真っ赤にさせて “貴方には、関係ありませんッ！”と 叫んだ。

母の様子に ジニーは、心配そうな表情を浮かべてしまっている。

少女の様子に ルシウスは、本を鍋の中へと戻し 鼻で笑いながら

息子と一緒に 店を後にしていく。

「一体 どういう事なんだよ。

何か 意味わかんないし。

後悔 つて どういう事なんだろう?

それに やたらと ママに突っかかつていたようだけじれ?

うちの事情なんて 関係ないはずなのに

ロンは、訝しげな表情を浮かべて マルフォイ父子の、後姿を見つめていた。

ハリー やハーマイオニー、 ウィルソン姉弟とオリバーとオリビアも 意味が分らず、顔を見合わせてしまっているようだ。

そんな兄達の様子に ジニーは、心配そうな表情を浮かべて あたふたしてしまっている。

手に持つた 大鍋の中身が、今にも 零れ落ちそうになってしまっていた。

他の兄達は、その辺の事情を知っているらしく 神妙な表情を浮かべて 顔を見合わせてしまっているようだ。

ウイーズリー夫婦やグレンジャー夫婦は、また 店の奥へと 消えていってしまう。

そんな大人達の様子を見送つて 何か 事情を知っているらしいメンバ一は、顔を見合わせるしかない。

「お前達は、知らないだろうけど 本当はさ?」

ママとあのルシウスは、元々 婚約者同士だったんだ。

ホグワーツの卒業を待つて 結婚が決まっていたらしいんだよ」パーシーは、訝しげな表情を浮かべて 呟く。

その言葉に そのことを知らなかつた面々は、驚きを隠せない様子

で 頭を見合わせてしまった。

「 ウィーズリー兄妹に至つては ショックのあまり、頭を真っ青にさせてしまつているようだ。」

「 「 前に ビルとチャーリーが、その話をしていたのを聞いた時だつたつけ？」

あの時は、僕らも同じような 反応をしていたな？」

フレッドとジョージは、そう言いながら 弟と妹の頭を、優しく撫でた。

「 知らなかつたのは、ロンとジニーだけだつたのね？」

けど その話を聞くと あのルシウス・マルフォイの態度も、納得がいくわ？」

それに マルフォイ氏とおじ様が、仲が悪い っていうのも それが、関係しているんじゃない？」 ハーマイオニーは、神妙な表情を浮かべて 呟いているようだ。

そんな少女の様子に ハリーは、戸惑いを隠せない様子で 奥で話しぃ込んでいる、ウィーズリー夫人を、見つめる。

モリーの表情は、重々しいようで アーサーが、妻の顔色を 心配しているらしい。

「 確か ホグワーツに在学中に パパとママが、付き合いだしたから 解消したんだつけ？」

いや 続いていた？

親が勝手に 決めた 話だつたんだろ？」

ママの実家は、元々 純血を重視して いうわけじゃ、 なかつたらしこれど。

まあ 血の繋がりでの親族間では、文句が言えない 立場だつたらしこれど、「フレッドは、首を捻りながら 言つ。

「 確か……話が分つてもられないから 卒業と同じ頃 駆け落ち結婚した つて話は 聞いたけど？」

その時の友達に 協力してもらつて。

ビルを産んだ後には、内輪だけでガーデニング結婚式……騙して

拉致られたっていうのが話を聞いている限り、正しい気がするけど。

まあ俺らが生まれた頃には、もう実家の両親とは、和解していただからな。

その頃は、闇の時代つて呼ばれていて……明日がないかも知れないつて不安がつた恋人とかが、次々結婚してたらしいんだけどさ？」

ジョージも、そう言いながら肩をすくめてしまつていうようだ。「で……確かその後ブラック家のナルシッサが、マルフォイと婚約したんだ。

それでホグワーツ卒業後にすぐ結婚して子供が生まれたつてわけだ」パーシーは、息をつきながら言う。ハリーとハーマイオニーは、その話を聞き困惑を隠せない様子で顔を見合させていた。

ウィルソン姉弟やオリバーとオリビアは、その隣で神妙な表情を浮かべて顔を見合させているようだ。

「そうだとしたらただ単に嫉妬しているだけじゃない。何だかマルフォイ夫人が、可哀想になつてくるわね？まあドラコのお母さんつていうのが、癪かもしれないけどオリビアは、溜息をつきながら呟いた。

少女の言葉にウイーズリーの面々は戸惑いを隠せない様子で顔を見合させてしまつているようだ

「そんなの僕知らなかつた。

つていうか……もしそうなつていたらあの男が父親になつていたかもしれないつてこと？！

そんなの絶対嫌だッ！

ものすごく……やなんだけどロンは泣きそうな表情を浮かべて呟いた。

ジニーも無言だが震えてしまつているようだ。

そんな2人の様子に一同は戸惑いを隠せない様子で顔を見合

わせてしまつていた。

「関係ないんじゃない？」

だつて みんなは、ウイーズリーおじさんとウイーズリーおばさんの子供なんだから。一人でも欠けていたら みんな ここには、いない。

だから 人との出逢いは、すごいのよ」 マリーベルは、溜息をつきながら 呟く。

「そうだよ？」

みんな ここに いるでしょ？

だから 気にすることなんてないよ。

みんなが ホグワーツで出逢えたのは、偶然かもしれない。

だけど 何度も巡り合つて……必然になつて 運命になるんだよ」

アルデルトは、苦笑しながら 言つた。

2人の姉弟の言葉に 一同は、驚いたように 顔を見合わせてしまつて いるようだ。

「それ……私も聞いた事が、あるな～？」

人は、人生という名の 道を、歩んでいる つて。

それに その道は、色々な別れ道があつたり 落とし穴があつて成長していく つて。

他のたくさんの人道と 繋がつていて 色々な出逢いがあるんだつて。

悲しい事も 嬉しい事も、ね？」 オリビアは、遠くを見る様子で呟いた。

「お……久々に聞いたな？」

オリビアの 「その言葉」 オリバーは、苦笑しながら 言つ。

パーシーもその隣で 息をついているようだ。

「確か スリザリンの連中に、泣かされた後 何度も 自分で、言い聞かせていたんだつけ？」

2人の友人の言葉に オリビアは、頬を膨らませてしまつている。

そんな3人の様子に 他のメンバーは、顔を見合させていたが す

ぐ
苦笑しだした。

「モリー……大丈夫かい？』

まさか こんな場所で あいつに 遭うとは、思わなかつたが」
アーサーは、神妙な表情を浮かべて モリーの顔を覗きこんでいた。
夫の言葉に モリーは、“大丈夫です”と 微笑んでいるようだが
顔は、真っ青になつてしまつているようだ。

そんな魔女の様子に グレンジャー夫婦は、心配そうな表情を浮かべて 顔を見合させてしまつて いるらしい。

「大丈夫ですか……奥さん？』

どこかで 休んだ方が。

足も ふらついてしまつて いるようですし』

グレンジャー夫人は、心配そうな表情を浮かべながら 赤毛の魔女の顔を、覗きこんで いる。

隣に立つて いる グレンジャー氏も、困惑を隠せない様子だ。

「それにしても あの人は、本当に 怖いですね？』

あんな目で、見られてしまつたら 本当に……』

夫の言葉に グレンジャー夫人は、訝しげな表情を浮かべて いる。

「あら ただ、見られただけで そんな調子なのなら 後々が 大変になつてしまふわ？』

あの子達は、もっと 危険な事に 卷き込まれてしまふかも しれない と いうのに。

あの男、相変わらず とんでもない性格をして いるのね？』

妻の言葉に 夫は、戸惑いを隠せない様子で 見守つて いた。

そんな夫婦の様子に ウィーズリー夫妻は、不思議 そうな表情を浮かべて 顔を見合せて いるようだ。

「娘さんから 前学期の事を、お聞きになつたのですね？」 アーサーは、神妙な表情を浮かべて 言つ。

隣のモリーも どこか、不安を隠せない様子で 答えを待つて いる ようだ。

「ええ……聞きました。

おそらく 娘の書いた 手紙が届かなかつた一件も 何かを、予言しての事なんでしょうね。

それでも 子供達は、立ち向かわないといけない「妻の言葉に グレンジャー氏は、心配そうな表情を浮かべて 先ほどから、話し込んでいる 子供達に、視線を走らせた。

「不甲斐無いです。

ただ 魔法が使えない、というだけで 娘を守ることも、ままならないだなんて。

去年の事件について ハーマイオニーから聞いた時は、本当に 驚きましたから。

あの時の事を、今更ながら 思い出しましたよ

グレンジャー氏の言葉に アーサーとモリーは、顔を見合させながら 難しい表情を浮かべている。

「大丈夫ですよ。

先ほども お話しましたように 魔法に関する 一件では、こちらで 娘さんをお守りします」 アーサーは、真剣な表情を浮かべて言つた。

夫の言葉に ウィーズリー夫人も、真面目な顔をしているようだ。
「確かに 魔法使いの家庭ですから……戸惑う事があるかもしれませんが 彼女なら、大丈夫ですよ。

彼方の 娘さんなんですから。ホグワーツでも 本当に、勉強家で 息子達も、褒めまわつていましたから
モリーも、そう言いながら 微笑んだ。

「理解は出来ています。

私は、確かに マグルかもしけませんが 事情は、察しているつもりですから。

姉の嫁ぎ先から 何かと 話は、聞いています

グレンジャー氏は、ニッコリと笑みを浮かべる。

「そろそろ 家に戻らないと。

夕食の準備が、まだ 出来ていなかつたわ？」

ふと グレンジャー夫人は、驚いたように 声を上げた。

夫人の様子に おそらく 魔法使い一家なのだろう人々は、苦笑してしまつて いるように 見える。

「 そりやか？

君の場合は、準備しても 準備しなくても 味は 同じだらう？
前は、レンジを爆発させたて 結局 僕が作る事になる」 グレンジ

ヤー氏は、小さく溜息をつきながら 言つた。

夫の言葉に 夫人は、訝しげな表情を浮かべて 蹤りを入れる。
その攻撃に グレンジャー氏は、その場に 座り込んでしまつて いるようだ。

「 確かに もう 買い物は終わりましたし 解散いたしますか？」

アーサーは、苦笑しながら 言つ。

その声が、鶴の一聲のように 子供達も、駆け寄ってきて 別れる事になる。

大人達は、また 世間話が出来るまでの時間まで。
子供達は、ホグワーツでの 再会まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4945p/>

ハリー・ポッターと邂逅(かいごう)

2011年1月21日07時17分発行